

中学校		
1年 組	2年 組	3年 組
氏名		



中学校 学習資料

別府学



別府学



別府市教育委員会



中学校 学習資料
別府学

別府市教育委員会





中学生のみなさんへ

わたしたちが住む別府市は、温泉湧出量、源泉数などから日本一の温泉地として知られ、そこから立ち上る湯けむりの景観は、「別府の湯けむり・温泉地景観」として、温泉地の景観としては全国で唯一、国の重要文化的景観に選定されています。

また、鶴見岳や由布岳、伽藍岳などの山々、美しく広がる別府湾、そしてそこに生きている植物や動物などの豊かな自然があります。

さらに、別府市にも古くからの長い歴史、伝統文化があり、湯の花製造技術など、現代にも受け継がれていることが多くあります。

ほかにも、油屋熊八に代表されるような別府

市の発展に大きな功績を残した人もたくさんいます。

今回の「別府学」の本は、地理や歴史、理科など学校で学ぶ内容を別府市の場合はあるかという視点から作成していますが、それだけではなく、みなさんが興味を持ちそうなことからも、イラストや写真で楽しく学べるよう工夫しています。

そしてみなさんが「別府学」を通じて、別府のことを学び、それにより郷土別府を誇りと愛着を持って、自らまちづくりに取り組むことを心から期待しています。

別府市教育委員会

目次

歴史 別府の古墳群	別府の古墳文化の始まり……………02 装飾古墳の終着地 鬼ノ岩屋古墳群…03 実相寺古墳群 太郎塚・次郎塚古墳…04 実相寺古墳群 鷹塚古墳……………05
風土記 に書かれた別府温泉	玖倍理湯、赤湯……………06 古代の駅 “長湯駅” ……………07
別府の地名 のおこり	なぜ別府と呼ばれたか……………08 鶴見岳信仰と別府の社寺……………09
大友氏 と別府	鎌倉から来た大友氏……………10 北九州の覇者大友宗麟……………10 石垣原の戦い……………12
別府の災害史	……………14
伝統文化	
豊後明礬と湯の花	明礬製造が始まる……………16 日本一の明礬製造……………17 明礬から湯の花へ……………18
歴史 江戸時代の争い	境界争い、入会地の争い……………20
先人の功績	
矢田家の人々	……………22
別府を訪れた文人墨客	……………24
歴史 明治維新と別府	井上馨と千辛萬苦之場 ……………26
戦争と別府	引揚げ船 高砂丸 ……………27 キャンプ・チッカマウガ ……………27

先人の功績	
油屋熊八と別府観光	……………28
温泉 別府温泉は日本一	……………34
温泉の色	……………35
上総掘りと温泉	別府を発展させた井戸掘り技術……………36
自然 絶滅の危機にある生物	
生物多様性保全の取り組み	……………38
別府市内で絶滅が危惧されている種	……………40
日本の生物多様性の特徴	……………42
別府市内で	
絶滅が危惧されている野生動物たち	…42
大分県の絶滅のおそれのある野生動物	…43
別府市街地で絶滅した動物たち	…44
バイオミミクリー	……………44
外来種問題	……………45
歴史 別府市域の発展	今の別府市はこうして広がった……………46
文化 鶴見七湯廻り	鶴見七湯廻りに見る風俗……………48 江戸時代後期の温泉の様子……………50
柳原白蓮	白蓮と赤銅御殿……………52
別荘文化	……………54
さまざまな文化財	……………56
地図 別府市全域地図	……………58
別府市中心部地図	……………60
別府市街地図	……………62
別府市北部地図	……………63



べっぷ 別府 BEPPU

市民憲章

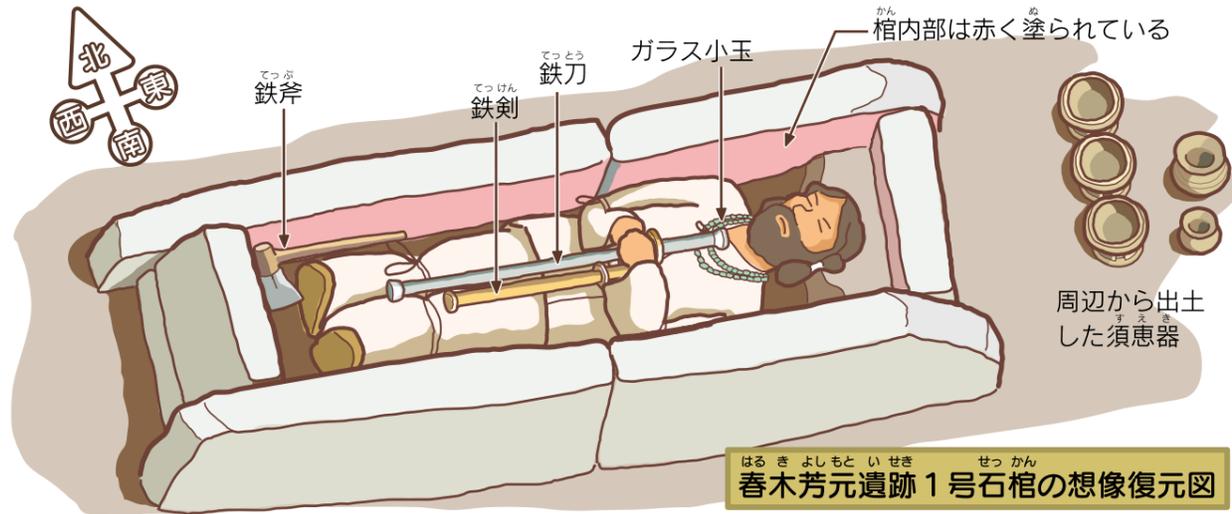
1. 美しい町をつくりましょう
2. 温泉を大切にしましょう
3. お客さまをあたたかく迎えましょう

昭和43年1月制定

別府学

別府の古墳群

別府の古墳文化の始まり

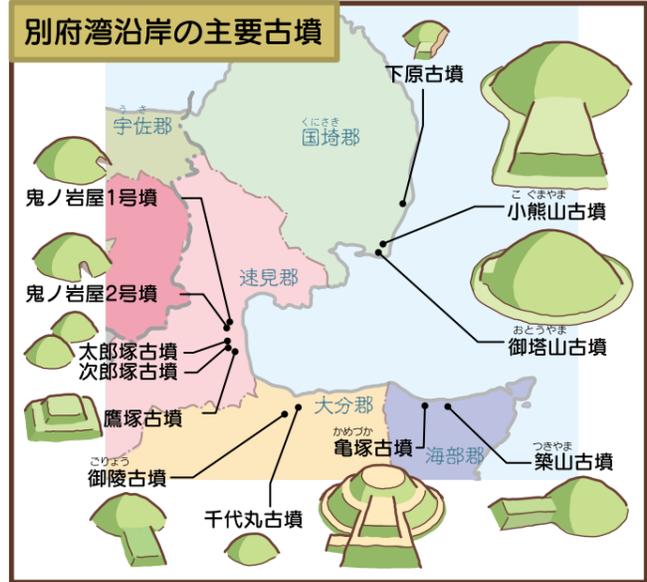


5世紀後半の古墳時代中期には、別府の地にも首長(有力者)が出現するようになります。春木芳元遺跡で発見された大型の箱式石棺は、安山岩を加工した組合せのもので、中から鉄剣、鉄刀、鉄斧、ガラス小玉等、立派な副葬品が出土しました。この石棺の周囲には方形の溝が確認されており、この古墳は盛土をもった方墳であったと思われます。春木芳元遺跡 1号石棺は、後の鬼ノ岩屋古墳群や実相寺古墳群につながる、別府地方の最初の首長墓と思われます。

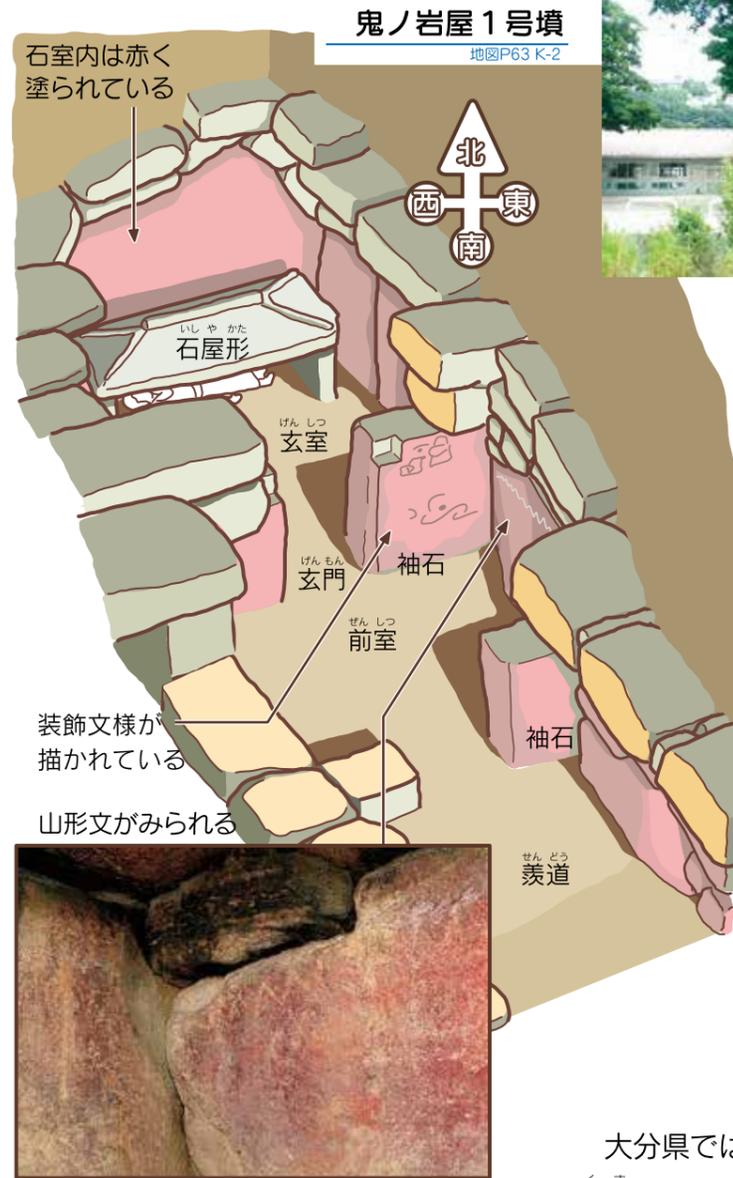


▲ 春木芳元遺跡 1号石棺
写真は実相寺古墳跡公園内に移設した石棺 地図P63 K-3
出土場所も 地図P63 K-3

別府湾の沿岸には、古墳時代に首長墓である大型の古墳が多く造られます。まず、4世紀の古墳時代前期に国東半島に最初の大型の前方後円墳が築かれます。5世紀代の古墳時代中期になるとその中心は、大分、海部地方に移り、多くの前方後円墳がそこに造られます。6世紀代になると、その中心勢力が別府の地に移り、鬼ノ岩屋古墳群や実相寺古墳群が築造されました。



装飾古墳の終着地
鬼ノ岩屋古墳群



鬼ノ岩屋1号墳、2号墳は、大きな盛土と巨大な横穴式石室をもつ大分県を代表する古墳時代後期の大首長墓です。両古墳は石室の規模が特徴です。また、その内部の壁面には様々な文様が描かれています。1号墳は一面に朱(赤色の顔料)が塗られており、側壁や袖石には、山形文や靴(矢の入れもの)や鞆(弓の防具)、弧状文様等が黄色で、また、三角文、S字文様等が黒色で描かれています。2号墳にも各所に盾、動物、双脚輪状文、蕨手文、同心円文等がのこされています。

大分県では、こうした彩色の装飾古墳は、日田、玖珠地方に多く見られ、その源流は筑後(福岡)、肥後(熊本)地方に求められます。別府の鬼ノ岩屋古墳群は、こうした地方との関係が深かったことを示しており、その文化の流れから別府の地は装飾古墳の東への終着点であるといえます。また、この2つの古墳は海岸にも近く、当時別府湾の海上からもよく見えたことでしょう。鬼ノ岩屋古墳群の主は、海上においても力をもった豪族であったと思われます。

調べる 考える

古墳時代の終り頃、別府の地の豪族が、なぜこのように大きな古墳を造ることができたのか考えてみよう。

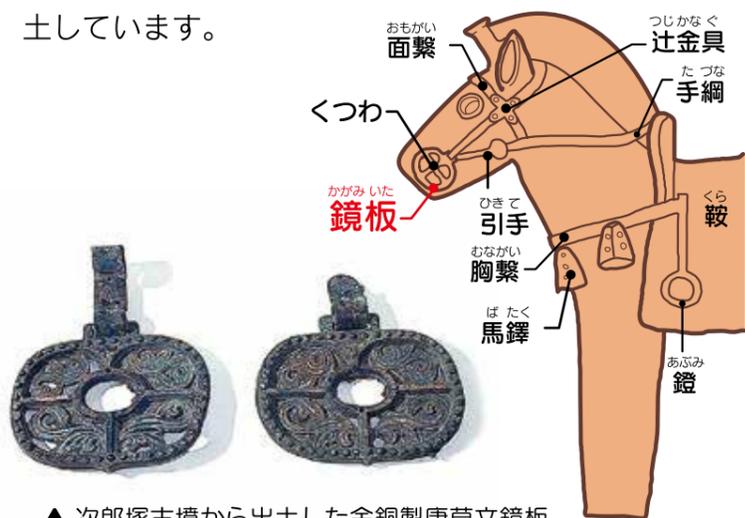


別府の古墳群

実相寺古墳群 太郎塚・次郎塚古墳

実相寺山の麓にある太郎塚・次郎塚古墳は、鬼ノ岩屋古墳群に次ぐ別府の豪族の墳墓です。近くには鷹塚古墳、天神畑古墳もあり、あわせて実相寺古墳群といわれています。これらはいずれも6世紀後半から7世紀始め頃に築かれたもので、天神畑古墳はすでに盛土を失ない、今は実相寺古代遺跡公園の中に石室が移されています。これを見ると古墳の墓室である横穴式石室の形がよくわかります。

太郎塚・次郎塚古墳は、ともに盛土が流失して小さくなっていますが、かつては直径23mを超える大きな円墳でした。平成20年(2008年)に行われた発掘調査によって、太郎塚古墳の後に次郎塚古墳が造られたことがわかりました。次郎塚古墳からは、当時朝鮮半島で作られたとみられる貴重な馬具の一種、金銅製唐草文鏡板が出土しています。



▲次郎塚古墳から出土した金銅製唐草文鏡板

太郎塚・次郎塚古墳は、その規模と出土遺物からみて、春木芳元遺跡1号石棺の後に出現した、別府の本格的な首長(豪族)の墳墓とされます。そして、その系統は、鬼ノ岩屋古墳群、鷹塚古墳へとつづくとみられます。



▲太郎塚古墳(向う側)と次郎塚古墳(手前)
実相寺古代遺跡公園 地図P63 K-3

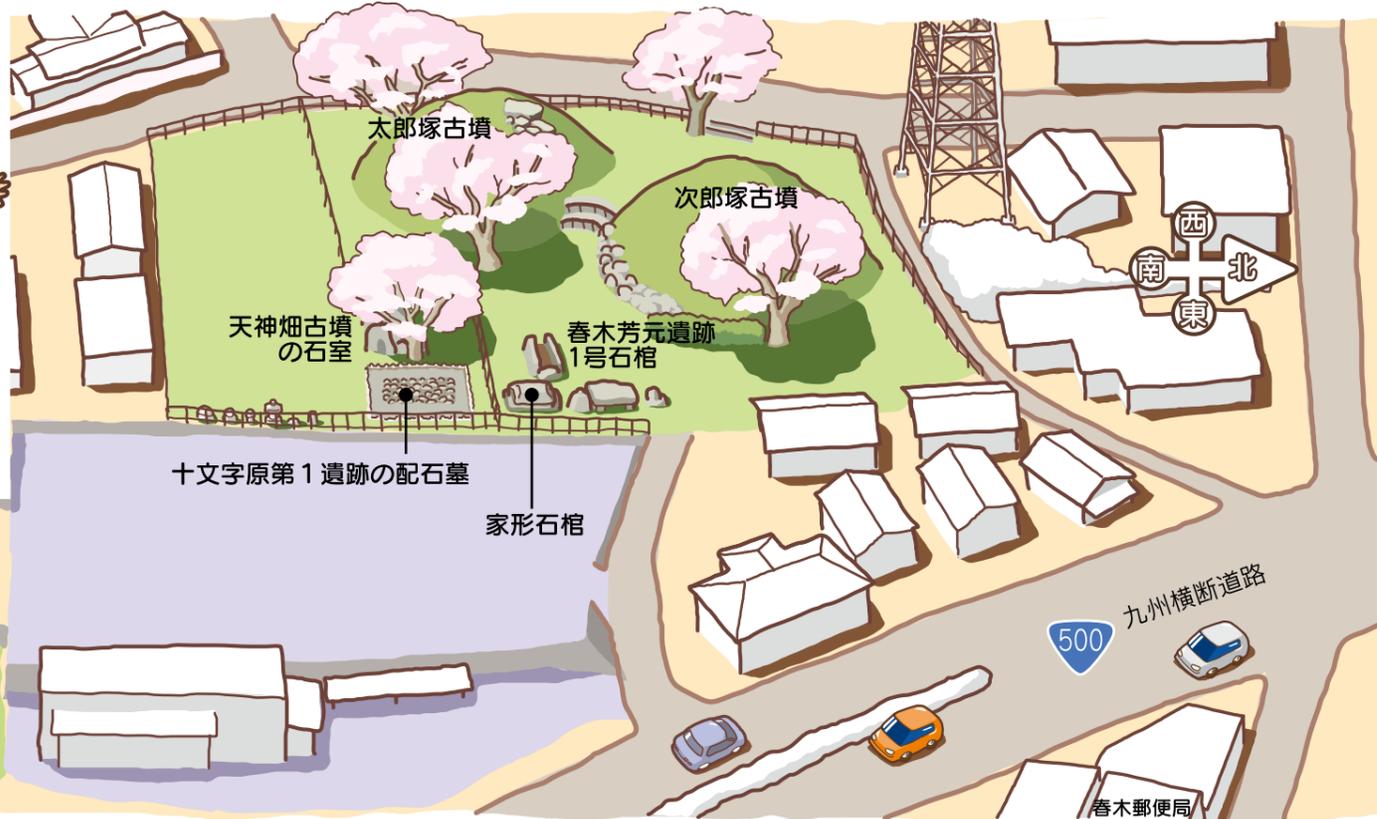


▲天神畑古墳 石室
実相寺古代遺跡公園内に移築されています。

実相寺古代遺跡公園 地図P63 K-3

調べる 考える

本物の遺跡にふれて、古代の世界を想像してみよう。けっこう楽しいぞ~。



実相寺古墳群 鷹塚古墳

実相寺古墳群の中で最も大きな鷹塚古墳は、太郎塚・次郎塚古墳の東100m程のところにあります。平成20~23年に発掘調査が行われ、それによって、古墳の形が円墳でなく、大きな方墳であることがわかりました。その大きさは一辺が約25m、高さ5mもあり、大分県下で最大のものであることがわかりました。その造られた時期は、6世紀の末頃とみられます。

鷹塚古墳の調査で、さらに驚くべきことがわかりました。それは、横穴式石室の石材の一つ一つが大きく、またその入口の幅を測ると2.5mもありました。これは鬼ノ岩屋1号墳・2号墳にくらべてか



▲鷹塚古墳 地図P63 K-3

なり大きく、通路にあたる羨道の長さも8mに及ぶ長大なものでした。その奥の玄室は未調査ですが、通路部分の大きさから推定して、その規模は鬼ノ岩屋古墳群をはるかに越えると思われます。この時期に、別府の豪族が、大和朝廷の有力者が用いていた方墳を造ったのは、その関係がきわめて深かったものと思われます。鷹塚古墳の主は古墳時代が終る頃、豊後地方全体を支配していたと思われます。

風土記に書かれた別府温泉 玖倍理湯, 赤湯

奈良時代のはじめに書かれた地誌『豊後国風土記』の中に、別府温泉の記事があります。そこには、「赤湯の泉、郡の西北のかたにあり、この湯の泉の穴は郡の西北のかたの竈門山にあり、其の周りは十五丈ばかりなり、湯の色は赤くしてひしあり、……」とあります。これは別府温泉の地獄の一つ内竈地区の「血の池地獄」を指していることに間違いないでしょう。また、「玖倍理湯の井、郡の西にあり、この湯の井は、郡の西の河直山の東の岸にあり、……」とあります。これは、その位置から現在の海地獄に代表される鉄輪の地獄地帯を示しているものと思われます。さらに、今の愛媛県の『伊予国風土記』逸文の中に、「伊予の湯郡の温泉(道後温泉のこと)は、大穴持命(大穴持命)が宿奈比古那命の治療のため、豊後速見湯(別府温泉のこと)を海底の樋で引いたものだと記しています。別府温泉は、古代から広く知られた名湯であったことがわかります。



▲血の池地獄 地図P63 J-1



▲豊後国風土記



▲海地獄 地図P61 D-1

別府と万葉集

万葉集に別府の地で歌われた「早見浜の歌」「我妹子を 早見浜風 大和なる我待椿 吹かざるなゆめ」があります。作者は天武天皇の第4子長皇子です。早見浜すなわち速見浜、別府の浜脇から関ノ江までつづく美しい海岸に滞在していた長皇子が、松林の中を吹き抜ける風に、大和(奈良県)で待つ妻を想いやって歌ったものです。はやみという言葉は風土記の中でも「速見の湯」とあるように、当時の別府の代名詞となっていたようです。

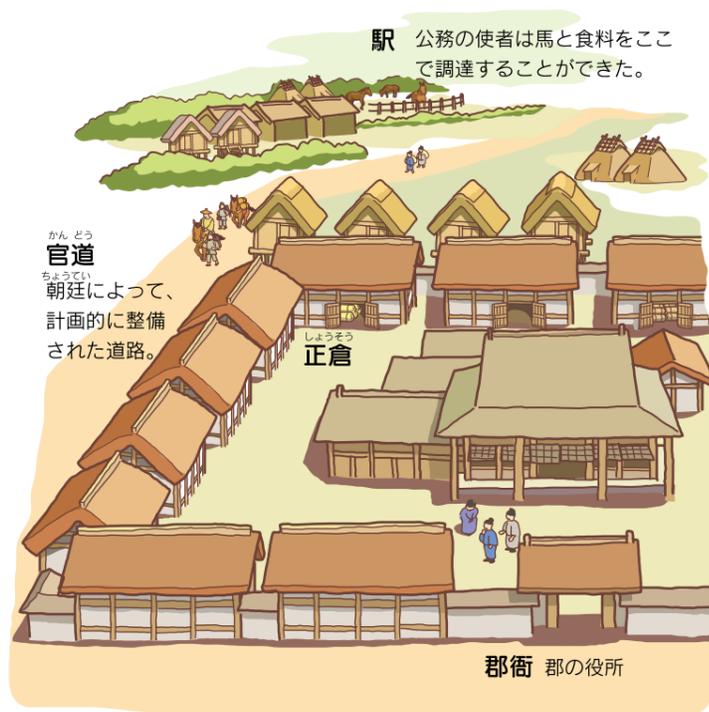
古代の駅 “長湯駅”

古代の主要幹線道路である官道の駅について『豊後国風土記』の速見郡の中に駅は2所とあり、平安時代の文献『延喜式』に長湯駅と由布駅が記されています。

その一つである長湯駅は、大分の高坂駅と由布駅の間にあり、その位置は別府と考えられます。古代九州の官道は、各国の国府を結びながら筑紫(福岡県)の大宰府(太宰府市)に至るもので、また、主要な郡の役所である郡衙も経由しています。豊後国風土記の記述からみて、速見郡の中心は別府にあり、ここから由布駅を経て大宰府へ向かう道と安覆駅を経て豊前国府に向かう道が分かっていたと考えられます。長湯駅はその2つの主要道が分かれる基点となる



駅と郡衙(郡役所)の想像図



重要な位置にあります。その所在地についてはまだわかっていませんが、候補地として、実相寺山の東側一帯があげられます。この地は、近くに実相寺古墳群があり、速見郡の中心がこのあたりと推定されるからです。また、江戸時代にはこの付近を小倉街道が通っていたことも参考になります。このほか永石地区も候補の一つです。

調べる 考える

古代の速見郡衙(郡役所)はどこにあったのでしょうか。豊後国風土記の中の記述を考証していけば、ある程度その位置がしぼられるのではないかと考えられます。

別府の地名のおこり

なぜ別府と呼ばれたか

温泉都市別府の名は全国にもよく知られていますが、“別府”という地名は他にもよくみられます。県内にも宇佐市の“別府”があり、宮崎県にも“別府”や国東市安岐町の“弁分”もその語源は同じです。もと、別府のおこりは“別符”が正しいものです。別符は平安時代の荘園から起ったものです。荘園は当時の貴族や社寺が中央政府から正式に認可された私有地であり、これに対し荘園に付属した原野の開発を地方の国司(国から派遣された地方官)等によって許可された文書を“別符”と呼び、それによって拓かれた土地も別符といいます。



▲ 別府村絵図



▲ 別府公園に点在する大岩は、荒地であった頃の石垣荘別府のようすを伝えています。 地図P62 G-1

別府市の別府はもともと“石垣別符”と書かれていました。宇佐八幡宮の荘園であった石垣荘、その付属の荒地を特別の許可によって農地としたところが別府です。石垣地域は、扇状地で水利もよく、早くから水田として開けており、有力社寺の荘園となっていました。その南側の別府地域は、河川の乱流などによって開発が遅れていたのです。この2つの地域の間で流れる川が現在の境川です。

※別府の地名を朝見弁分とする説もあります。



鶴見岳信仰と別府の社寺

別府市の背後にある鶴見岳は、噴火の記録をもつ活火山です。貞観9年(867年)に噴火があり、多数の死者と土石流による被害が出ています。平安時代のはじめの頃のことです。鶴見岳はそれ以前にもたびたび火山活動があり、人々に恐れられていました。その噴火を鎮めるための

神社が、別府市鶴見にある火男火売神社です。そして、鶴見岳の八合目のところに、この神社の上宮拝殿があり、その近くに神宮寺である行常寺の跡があります。この頃の有力な神社には神宮寺と呼ばれる寺院が造られており、神仏習合が盛んであったことがわかります。



▲ 火男火売神社 上宮 地図P58 A-3



▲ 火男火売神社 中宮 (上宮拝殿) 地図P58 A-3



▲ 火男火売神社(鶴見権現) 下宮 地図P61 D-1

一方、石垣荘の鎮守社であった石垣八幡宮にも石垣寺という神宮寺があったと伝えられています。また、火男火売神社は鶴見権現と呼ばれ、延暦寺の支配下で、天台宗と深い関係にありました。後に、鉄輪温泉に永福寺を開いた時宗の開祖、一遍上人も鶴見権現を訪れたと伝えられています。



▲ 石垣八幡宮 地図P61 F-1

大友氏と別府

鎌倉から来た大友氏

中世の豊後の領主であった大友氏は、最初豊後にどのようにして入国したのでしょうか。鎌倉幕府が開かれる前に、源頼朝は、豊後国を支配下に置きました。その守護職として相模国（神奈川県）から入国したのが、大友氏の初代の能直です。そして、その最初の上陸地点が別府の浜脇浦と伝えられています。入国に際しては、その土地の反対勢力が各地で抵抗していました。別府に近い高崎山には、阿南惟家が籠り、上陸を阻もうとしましたが、落城し大友氏の入国を許しました。大友能直が最初に入国したことについては、異説があります。実際は、能直の養父中



▲ 大友氏が上陸したといわれる浜脇浦と高崎山 地図P58 C-3

原親直が豊後守護職に任命されたのであり、能直はその職を養父から譲り受けたという説です。いずれにしても大友氏が豊後を直接支配するようになったのは、能直の子親秀からといわれています。後の大友氏21代宗麟(義鎮)は、特に別府の浜脇にあった別荘をよく利用していたといわれています。



▲ 浜脇中学校 地図P61 F-4

▲ 浜脇中学校が建つ以前の浜脇公園、この敷地に大友家の別荘があったといわれる。

北九州の覇者大友宗麟

豊後守護となった大友氏21代の大友宗麟(義鎮)は、中国地方の大内氏の圧力を抑えて、北部九州の支配に力を注ぎました。まず、足利将軍家の信頼を得て肥前国(佐賀県と長崎県)の守護となり、さらに勢力を伸ばして、豊前(大分県と福岡県の一部)と筑前(福岡県の一部)の守護に任命されました。その前にも、肥後(熊本県)に家臣を派遣して

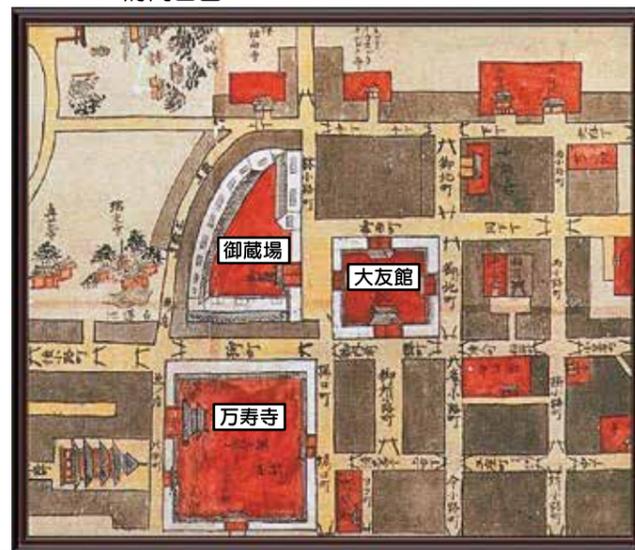


▲ 大分駅前宗麟像

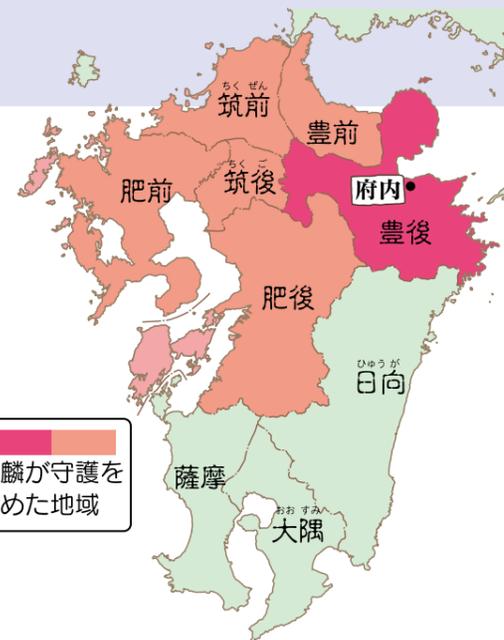
実質的に支配を固めていました。こうして、宗麟は北部九州6ヶ国の覇者となりました。これが大友氏全盛期の姿です。

大友宗麟のとき、なぜこれだけの勢力を拡大できたのでしょうか。その要因として、積極的な海外貿易があげられます。博多港では明(中国)と、府内では南蛮貿易を行い、貴重な鉄砲などの品物を入し、それらを将軍家に献上しています。その後、中国地方の毛利氏や薩摩の島津氏に攻められ、徐々に支配地を失ってきました。ともあれ、大友宗麟は戦国時代にキリシ

▼ 府内古図 (大分市歴史資料館 提供)



▲ 大友城下町想像図



宗麟が守護を務めた地域

タン大名として、大分に独自の文化を築き、九州に大きな歴史を残した人物といえましょう。

府内古図と大友城下町

県内に、中世府内城下町の様子を描いた“府内古図”という古絵図が残されています。それが写されたのは大半が幕末のものであり、その内容については確証がなかったのです。しかし、その後新たな古図が発見され、描き方などから大友全盛期の府内を伝えていることがわかりました。さらに決定的となったのは、平成9年(1997年)に古図の大友館とされているところから巨大な庭園跡が見つかりました。その後の発掘調査も古図にそった町並みが確認されるなど、府内古図の史料としての価値が高く評価されることになりました。



▲ 発掘された大友館の庭園跡 (大分市教育委員会 提供)

大友氏と別府

石垣原の戦い (1)

当時の朝鮮に侵攻した文禄の役(1592年)で失態を見せた大友家22代の義統は、豊臣秀吉の怒りを買って国を没収され、身柄を毛利輝元に預けられました。父宗麟の時代に隆盛をみた大友氏がここに終りを告げたのです。義統は山口の寺院に置かれていましたが、その後、水戸(茨城県)の佐竹氏のもとに移されました。慶長3年(1598年)に秀吉が死んだ翌年、義統は許されて江戸にいた息子能乗の家に身を

寄せていました。秀吉の死後、大坂(大阪)では徳川家康(東軍)と石田三成(西軍)の対立が深まり、この機に乗じて義統は豊後に入ることを画策しました。



▲ 吉弘統幸



▲ 黒田孝高(如水)



当初、義統は子の能乗が徳川秀忠に仕えていたことや黒田氏と密約を結んでいたにもかかわらず、石田三成の誘いに乗り、西軍につきました。この時、旧臣吉弘統幸は、情勢からみて西軍は絶対不利であ

ると説得しましたが、聞き入れられず、統幸も死を決して義統に従うことになりました。この時の統幸の言葉を聞き入れて東軍に留まっていれば、大友氏の運命は大きく変わっていたかもしれません。

石垣原の戦い (2)



大友義統は西軍の毛利輝元から船と鉄砲隊100人を与えられ、失なった領地を回復するため、安芸(広島県)から豊後へ出帆しました。しかし、義統にあてがわれた足軽隊は日出の深江港に着くと大坂へ逆戻りしました。それでも義統は、別府浦(浜脇)へ上陸し、立石(別府市南立石)に陣をじきました。そして、ここに旧臣の田原親賢や宗像掃部らを召集しました。吉弘統幸は遅れて国東富来浦へ着き、安岐、杵築を経て立石の本陣に合流しました。一方、東軍の黒田孝高は国東から軍を進め、先発の松井氏(細川

氏家臣)と共に実相寺山周辺に陣を構えました。これをみて大友義統は吉弘統幸を将とする本隊を石垣原に出陣させました。統幸はよく戦い、初戦において松井勢を敗退させました。しかし、黒田や竹中重利の大軍が松井軍に加わったため、統幸は奮戦むなしく戦死しました。これによって大友勢は総崩れとなり、大友家再興の夢は消えてしまいました。吉弘統幸の戦いぶりは、敵方にも称讃され、現在、石垣原の地に、統幸の霊を祀る吉弘神社が建てられています。



▲ 吉弘神社

▲ 吉弘統幸墓(右奥)と細川氏が供養のため建立した石殿(左手前)

断絶した大友の歴史はどうして今に伝えられたのでしょうか?

大友義統が国を失なって、山口に移され、大友主家はここに断絶しました。鎌倉時代以来、代々伝えられた重要な文書は、この時、義統の息女によって、大友氏の庶家(一族)である筑前の立花氏に預けられたようです。立花氏は、宗茂の代に筑後柳川の大名となり江戸末まで存続しています。



▲ 神山といわれた鶴見岳

主に自然災害についてその歴史を見てみましょう。

『続日本紀』に記された山崩れ

別府市で災害に関する最も古い記録は、『続日本紀』に記された山崩れです。奈良時代の宝亀2年(771年)に敵見郷(朝見郷の旧名)で発生した土石流で亡くなった人は47人、埋もれた家屋は43軒にもものほったそうです。翌年この報告を受けた朝廷は、庸・調の税を免除し、被災者に米、塩を届けました。

鶴見岳の大噴火

平安時代の貞観9年(867年)には鶴見岳の大噴火が起こったことが『日本三大実

録』に記録されています。この噴火のときには、山頂付近の池が激しく震動し、突然硫黄の臭いが国中に充満し、大きな岩が飛び散り、黒い噴煙が空を覆い、火山灰は広い範囲にわたり降り積もりました。池から溢れ出た熱湯が、川に流れ込み、多くの魚が死にました。このときの人や家屋の被害がどのくらいかはわかっていませんが、大きな被害があったことは間違いありません。この年、朝廷は鶴見岳の神である火男火売神を鎮めるために位を授けました。

このように、別府にとって火山は人々に大きな被害をもたらすものでしたが、同時に温泉という恵みも与えてくれました。

近年では、昭和49年(1974年)に鶴見岳の噴気が150メートルの高さに上がり、噴火口付近に小石が飛び散るとい、小規模な噴火がありました。

地震



▲ 北部地区公民館の倒壊した石垣

慶長元年(1596年)に豊後、伊予(愛媛県)、京都で立て続けに大地震が起こりました。別府地方を中心とした豊後地震では、マグニチュードは7.0~7.8、死者は700人といわれています。この3つの地震をあわせて慶長大地震と呼んでいます。

江戸時代後期の安政元年(1854年)12月に発生した豊予地震では、別府地方でつぶれた家屋が200軒で、震度6もあったといわれています。

昭和50年(1975年)4月の大分県中部地震は、大分県下に大きな被害がありましたが、別府市の被害はそれほど大きなものではありませんでした。

平成28年(2016年)4月16日の地震は、別府市でこれまで最も揺れが大きく、

震度6弱を記録しました。家屋の全壊や半壊、石垣の倒壊など大きな被害をもたらしました。

洪水

別府市は、大雨が降ると扇状地を流れる平田川、春木川、境川、朝見川などが氾濫し、大きな被害をもたらすことがあります。

享保14年(1729年)9月、はげしい風雨で境川が大洪水となり、20軒の家がつぶれ、21人の溺死者がでました。中部中学校の南側の墓地には、死者を供養するための「石書大乘妙典塔」が建てられています。

そのほか、寛政12年(1800年)、天保9年(1838年)、安政2年(1855年)にも朝見川、境川、春木川で豪雨による氾濫など、大きな被害が出たことが記録に残されています。これらの水害のいくつかは、台風や集中豪雨であった可能性があります。



▲ 野口原で発掘された五輪塔群は数メートルの土砂に埋もれていた

豊後明礬と湯の花

明礬製造が始まる

やまなみハイウェイから国道500号線に入って安心院に向かうと、明礬地区の道路ぞいにわらぶきの小屋がたくさんあるのが見えてきます。これは入浴剤である湯の花を採るための湯の花小屋です。

しかし、江戸時代にはここで明礬が作られていました。明礬は硫酸カリウムアルミニウムの結晶で、布を染める時や皮なめしに使ったり、湿布薬や止血剤など医薬品としてなくてはならないものでした。

豊後明礬の製造は、寛文4年(1664年)に肥後国八代出身の渡辺五郎右衛門が鶴見村照湯(現在の小倉地区照湯)で試みたのが始まりだといえます。しかし、この試みは失敗し、2年後の寛文6年によようやく成功しました。



▲ 明礬の結晶



▲ 渡辺五郎右衛門の墓



▲ 豊後国速見郡鶴見七湯廻記「明礬山」 (大分県立歴史博物館 所蔵)



▲ 豊後国速見郡鶴見七湯廻記「明礬粘土」
青粘土は明礬製造にかかせない。採掘にはたいへんな労力が必要。

日本一の明礬製造

渡辺五郎右衛門は明礬の製造事業を拡大しました。しかし、中国からの安い唐明礬の輸入で、さびれてしまいました。

その後、参入した脇屋儀助は幕府に願い出て唐明礬を排除し国産明礬の専売を実現。江戸時代中期には明礬地区などで明礬を製造し、日本一の生産量を誇っていました。しかし、江戸時代末期、豊後明礬は中国などから輸入される安価な唐明礬と再び競合して、次第に衰退していきました。

豊後明礬の隆盛と衰退物語

うちの明礬の品質には自信があるのだけれどなあ。安い唐明礬さえなければ...

お上(幕府)に願ひ出ましよう。

大坂(大阪)の商人近江屋八兵衛

脇屋儀助

幕府の薬事方 丹羽正伯

そのほうの言い分をここで証明してみよ。

脇屋儀助は精製法を披露

丹羽正伯は医師たちに命じ、薬効を確かめる。

ははあ

これからは励みになる。

唐明礬の輸入をさし止めよう。その上で、安く市場に出すなら、明礬の輸入を許さる。

江戸と大坂(大阪)に明礬を取引きする会所の設立が許され、専売品として生産の拡大が進んだ。

幕末には保護されていた専売体制は崩れました。

さらに明治時代になると、海外貿易が盛んになって明礬の輸入が増え、豊後明礬の経営は苦しくなっていました。

しかし、この技術は、やがて湯の花製造として今に引き継がれています。

豊後明礬と湯の花

明礬から湯の花へ

明治17年(1884年)、明礬製造技術を用いて作られた湯の花は関西地方で大好評を得ました。日本最初の温泉入浴剤として、明礬製造の伝統技術が復活したのです。

湯の花ができるまで

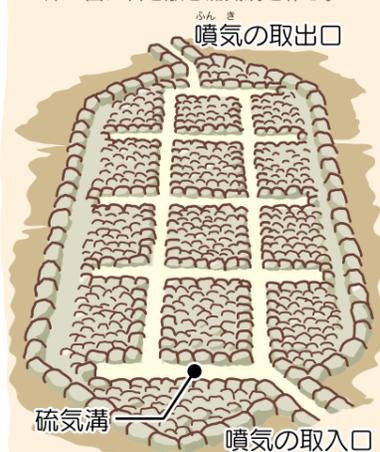
1 青粘土(ぎち)の掘り出し

温度の高い温泉が出る場所
でないと採れない青粘土

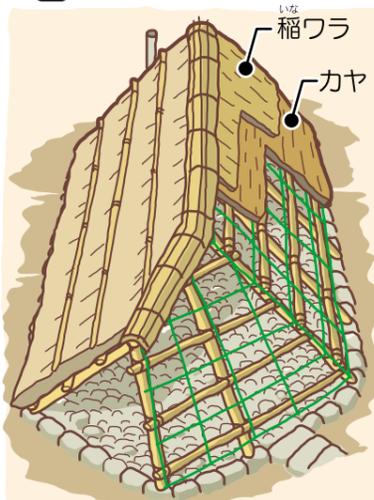


2 「床」づくり

床一面に石を敷き硫気溝を作る。



3 小屋づくり



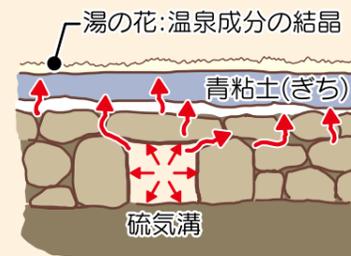
4 青粘土いれ



5~10cmの厚さに広げる

5 噴気の引き入れ

敷石の間を通過して、噴気がまんべんなく青粘土に行き渡るようにする。



6 温度・湿度の管理

温度・湿度を調節する通気口。
地床全面の温度を35度くらいに保つ。



7 採取

1ヶ月ほどして湯の花の結晶が
10~30mmに成長すると採取。



8 青粘土の取り替え

湯の花の採取を繰り返すと、青い色の粘土が徐々に白くなり、湯の花の結晶ができなくなる。そのため、青粘土は年2~3回取り替える



別府の湯の花は自然の化学合成で製造されます。湯の花小屋の床には青粘土が敷き詰められ、その下には細いトンネルがあります。亜硫酸ガスを含む噴気はトンネルから青粘土を通過して空気中に出てき

ます。その時、青粘土の中のカリウムやアルミニウムと化合して、青粘土の表面に明礬の結晶を作り出します。これを専用のコテで採取したものが、別府湯の花です。

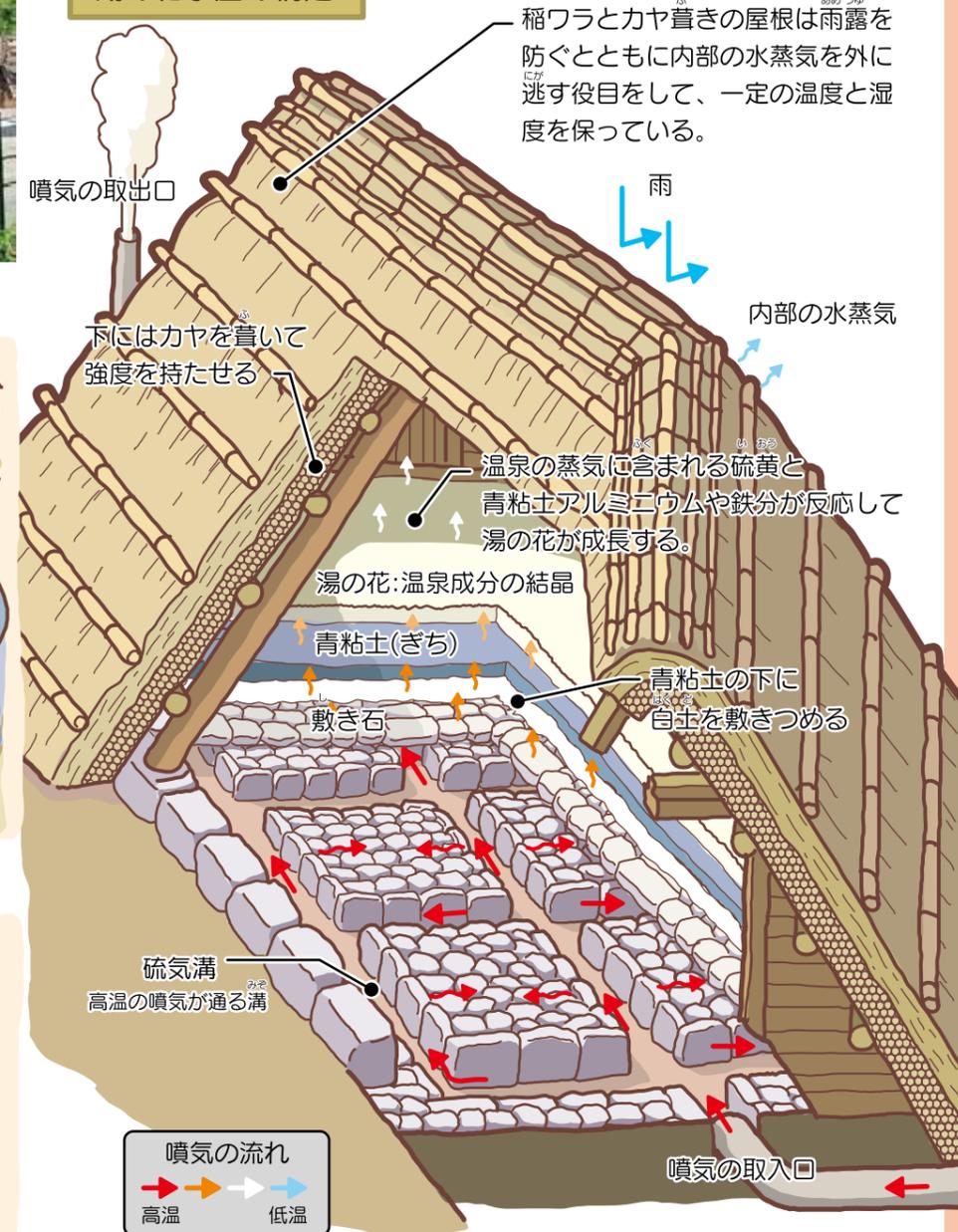
世界で唯一の湯の花製造

このような伝統的な製造方法を守っているため、平成18年(2006年)に「別府明礬温泉の湯の花製造技術」として国重要無形民俗文化財に指定されました。



明礬の湯の花小屋
地図P58 B-2

湯の花小屋の構造



湯の花小屋の内部



江戸時代の争い

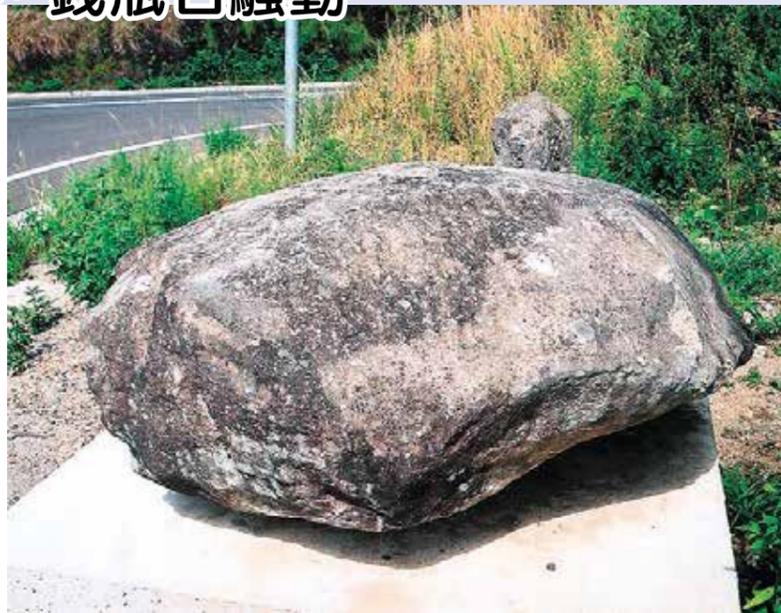
境界争い、入会地の争い 銭瓶石騒動

江戸時代には秣場をめぐって村落同士の争いが絶えませんでした。

秣場とは、牛馬の飼料や小屋の床に敷いて厩肥や堆肥にする草を刈る採草場です。また屋根を葺く茅や煮炊きや暖房に使う薪をとる場所もありました。これらの場所は村同士の入会地(共有地)で、入会権とよばれる古来からの慣習や協定によって維持されていました。

ところが草を刈る時期や刈り取る量などで村同士が争うことがありました。争いが起きると他村の庄屋数人が仲裁に入り苦労して収めました。

宝暦年間(1751~63年)、浜脇村赤松の農民が府内藩を相手に争いを起こしました。鳴川の谷あい(東西にはしる道)は、府内藩と幕府領(天領)浜脇村の領境でした。谷あいは双方の秣場で、浜脇側では道が片よっている(右ページ)ので草刈場が狭いという不満がありました。



▲ 現在の銭瓶峠にある銭瓶石 地図P58 C-4



銭瓶石騒動その1

銭瓶石騒動その2

宝暦11年(1761年)3月、幕府の巡見使が豊後の見廻りに来るので、府内藩は道の整備を計画しました。一方、浜脇村赤松の住民は、入会地の不満を幕府に訴えようとしていました。

浜脇方は、道造りの作業を始めた道造奉行や人夫に対して鉄砲で威嚇し槍や長刀を抜いて襲いかかり、作業道具を奪い、道造奉行を捕らえて引き揚げました。

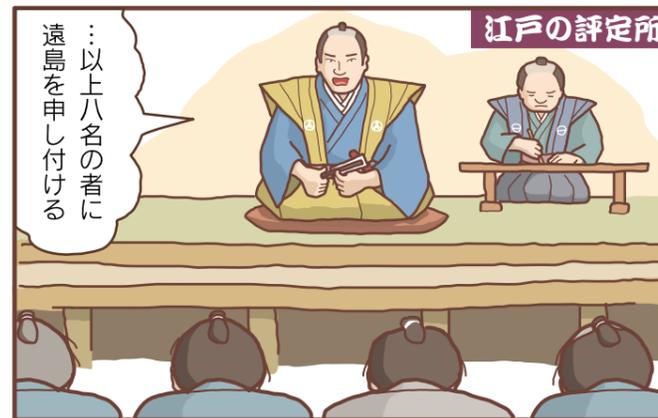
日田の西国筋郡代と府内藩が幕府に訴え出たので、6月、江戸の評定所に呼出され吟味(罪を取り調べる)が始まりました。

結局、御禁制の鉄砲や武器を持ち出したことで浜脇村赤松方にお咎があり、8人の農民が三宅島などに流されました。また「喧嘩両成敗」で、府内藩も殿様や役人が謹慎のお咎めを受けました。この事件を「銭瓶石騒動」といいます。

[銭瓶石騒動の決着]

幕府領(天領)の農民は幕府に年貢を納めていたので、思い上がった行動に出ることがたびたびありました。このことを「天領風を吹かす」といいました。結局、鳴川谷の領境は天領の赤松方の有利に決着しました。後世、遠島になった8人に感謝を込めて「遠嶋八名之塔」が建てられました。

地図P58 C-4



先人の功績

矢田家の人々

江戸時代の中石垣村に親子孫三代5人にわたって、日田の咸宜園で学んだ一族がいます。矢田家は代々医師を生業としていました。父親の矢田連は文化2年(1805年)、咸宜園の前身の成章舎で学び、中石垣村の医師になりました。

咸宜園



矢田 淳 コレラから別府を守る

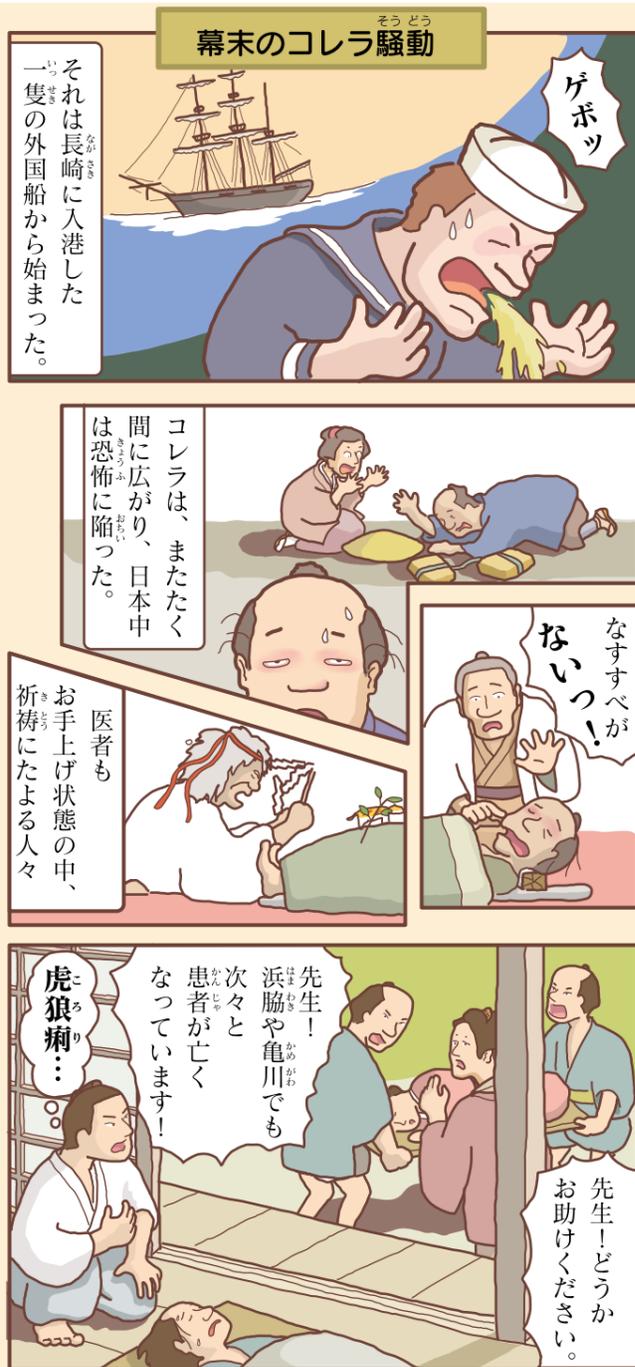
矢田連の長男の淳は文政12年(1829年)16歳で咸宜園に入門しました。その後、医師を志望する淳は長崎の鳴滝塾でシーボルトにオランダ語と蘭方医学を学び、帰郷して父の医院を継ぎました。

向学心にもえる淳は、医院を弟の孝治にまかせて、大坂の緒方洪庵の適塾でオランダの医師セニデンハムからコレラの治療方法を学びました。

安政5年(1858年)に長崎で南蛮船から虎狼痢(コレラ)が流行し、浜脇村でも多くの死者がでました。別府村と石垣村でも5~60人がかかりましたが、矢田淳が適塾で学んだ治療で、1人の死者も出ませんでした。

矢田 孝治

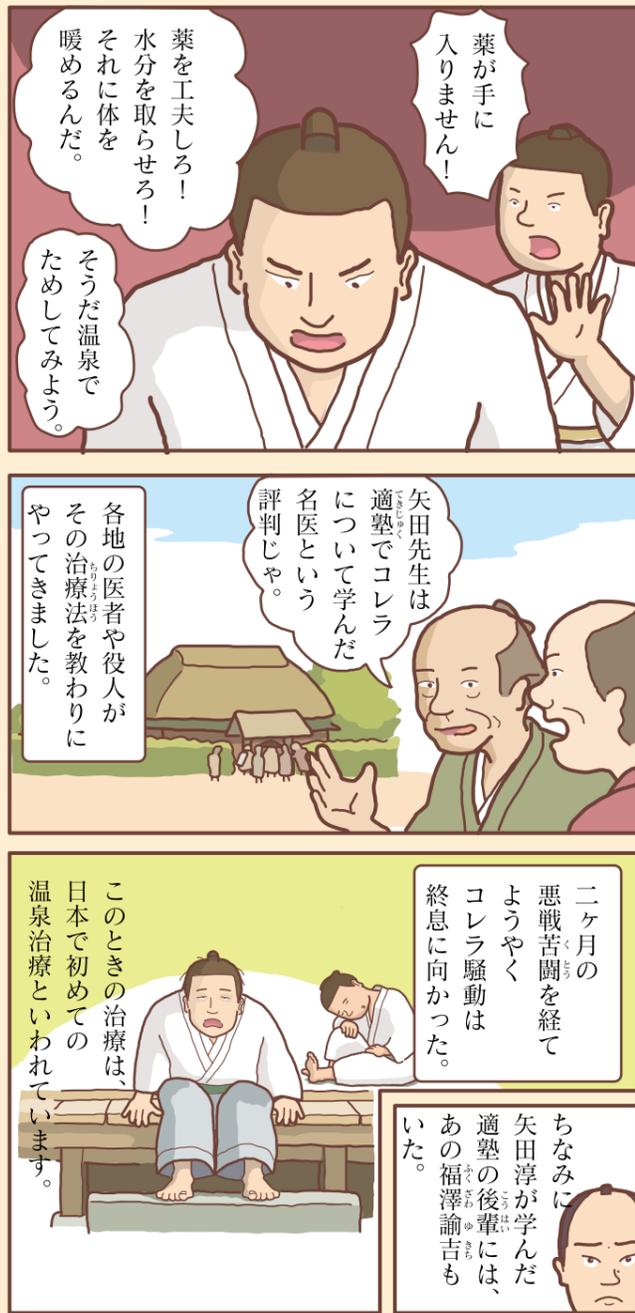
次男の孝治は13歳で咸宜園に入門し、漢詩が得意で咸宜園を代表する詩人になりました。卒業後は石垣で家業の医院を継ぎました。



矢田 希一

三男の希一は、天保14年(1843年)17歳のときに咸宜園に入門しました。文久2年(1862年)、中石垣村に別府ではじめての私塾「対岳楼」を開き、咸宜園をモデルとした教育を始めました。

地図P61 F-2



ルとした教育を始めました。

塾生の多くは、石垣近郊の神官や僧侶、庄屋、医師の子弟で、のちに別府の発展に貢献した者も多くいました。

主な教科は漢学、蘭学の二つで、8歳から13歳までは読書や習字、13歳以上は主に国学や蘭学、漢学を学習しました。対岳楼では、明治10年(1877年)までに延べ200人の門下生が学びました。

希一はその後、地方議会の議員になって地方政治の充実に貢献しました。



▲ 最近まで残っていた対岳楼の門

矢田 宏

淳の長男の宏も安政7年(1860年)咸宜園に入門しましたが、まもなく中退して奇兵隊に加わるなど倒幕運動に参加しました。宏は反骨精神が強く、維新後も政府に抵抗して何度か捕らえられました。西南戦争では西郷軍に加わり、国事犯として服役した後、新潟の師範学校の教師や徳島で公務員になりました。

先人の功績

別府を訪れた文人墨客

貝原益軒 (1630年—1714年)

江戸時代の福岡藩の本草学者、儒学者、藩医です。

元禄7年(1694年)、65歳のときに豊前・豊後の史跡調査を行い、それをまとめた見聞記が『豊国紀行』です。同年4月に

頭成(日出町豊岡)、亀川、平田をまわり、鉄輪の蒸し湯、滝湯、鬼山地獄、海地獄、

円内坊主地獄をみて、石垣を通って別府村に宿泊し、翌日舟で府内(大分市)へ向かいました。

『豊国紀行』には、鉄輪は地獄が多いことや、人々は乾浴(石風呂のこと。現在の蒸し湯に近いもの)をしていると書かれています。

石垣の地名の由来は、もともと石が多く、地元の人々はこの石を積み上げて石垣を造っていたとあります。

別府村は民家が500軒ほどあり、家の中に温泉があるところは10箇所と書かれています。

そのほか、別府湾には昔の別府村があり、その近くにも久光村があったが地震で沈んでしまったことや、立石では初めて明礬製造をおこなったことなども書いています。



古川古松軒 (1726年—1807年)

江戸時代の地理学者です。天明3年(1783年)5月に別府地方に来て、紺屋地獄、油やの地獄、酒屋の地獄、血の地獄、池の地獄などを見物して別府村へ到着しました。別府村は、「ながながしき在町」とかかれ、街道沿いに家が建っていること、各家には温泉があること、その温泉はちょうどよい湯かげんであることなどが書かれています。

これらのことをまとめた『西遊雑記』を著わしています。

伊能忠敬 (1745年—1818年)



▲伊能忠敬 測量史蹟碑 地図P61 F-4

江戸時代後期の測量家・地理学者。50歳のときに天文学を学び始め、56歳にして幕府の許可を得て全国を測量しました。

別府を訪れたのは、文化7年(1810年)、忠敬66歳のときです。頭成、小浦(いずれも日出町豊岡)、小坂、古市、亀川、平田の各村を測量し、午後からは、石垣各村、別府村、浜脇村を測量したあと、別府村の商家荒金市郎兵衛宅に泊まり、翌日府内(大分市)に向けて測量を続けました。

測量の基点となった流川4丁目の角には、伊能忠敬測量史蹟の石碑が建っています。



▲伊能図(部分)

森鷗外 (1862年—1922年)

明治・大正時代の小説家で陸軍軍医。明治33年(1900年)、36歳のときに陸軍軍医部長として大分県を視察し、このとき別府に立ち寄り、別府から大分まで新設したばかりの路面電車に乗りました。

菊池幽芳 (1870年—1947年)

大阪毎日新聞社の記者でしたが、明治34~35年(1901~1902年)に別府の日名子旅館に約半年滞在し、『別府温泉繁盛記』を執筆し、大阪毎日新聞に連載しました。



別府温泉の名を関西地方に広めた功績は非常に大きく、この後関西方面から船で別府観光に来る人が増えたといわれています。

斎藤茂吉 (1882年—1953年)

明治時代末から昭和の歌人。長崎で教授をしていた大正7年(1918年)から10年まで何回か別府を訪れています。歌集『つゆじも』に別府を詠った歌が掲載されています。また、全集の中にも別府を散策した様子が手記の中に書かれています。

竹久夢二 (1884年—1934年)

明治時代から昭和初期にかけて美人画を描いた夢二は、大正7年(1918年)ごろに別府の日名子旅館に滞在しています。

若山牧水 (1885年—1928年)

明治時代から昭和の始めに活躍した歌人です。昭和2年(1927年)7月に、別府の亀の井ホテルに療養のため1週間ほど滞在し、歌2首を詠んでいます。

与謝野寛 (1873年—1935年)

明治時代から昭和にかけて妻与謝野晶子とともに活躍した歌人です。夫婦でよく講演などで全国を回り、別府にも何度か来ました。昭和6年(1931年)に来たときは、船で別府に到着し亀の井ホテルに泊まりました。そのとき別府高等女子学校(鶴見丘高校の前身)などで講演するかたわら、久住高原、湯布院、宇佐神宮などを見て回り、10日ほどして船(すみれ丸)で別府をあとにしました。

明治維新と別府

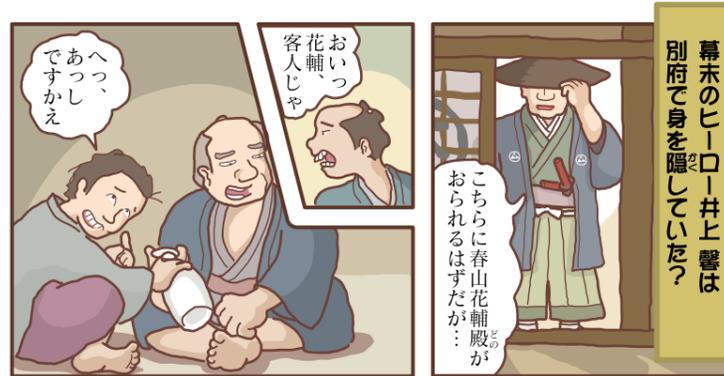
井上馨と千辛萬苦之場

別府市公会堂の駐車場の北側にある土蔵造りの小さな建物は、明治維新や明治政府で活躍した山口出身の井上馨が、療養のため長く滞在したときの建物です。(右写真)

元治元年(1864年)9月、井上馨は山口で、刺客に襲われ重傷を負いました。次の年、慶応元年(1865年)2月に、伊藤俊輔(のちの総理大臣=伊藤博文)に勧められて春山花輔という名前で別府に来て、楠町の旅館(旅館)「若彦」の離れに滞在しました。井上は、若彦の主人彦七や港で働く人夫の元締め(なだかめ)の灘亀など多くの人の世話になり、しばらくして山口に戻り、のちに明治政府の外務大臣、大蔵大臣などを務めました。



▲ 千辛萬苦之場 地図P61 F-4



▲ 恩のある彦七の遺族と再開した井上馨 (左から3人目)

それから時は過ぎ、明治44年(1911年)5月、井上は再び若彦(「若松屋」に名前が変わっていました)を訪れ、彦七の遺族と再会しました。そのとき苦労した昔を懐かしみ『千辛萬苦之場』と書いて遺族に贈りました。

この若彦の離れの建物は、昭和8年(1933年)に今の場所に移し建て替えられ、千辛萬苦之場とよばれ、明治維新と別府のかかわりを知ることができます。

戦争と別府

引揚げ船 高砂丸

第二次世界大戦の終結により、中国大陸や東南アジアなどに残された軍人や一般人を帰国させるための船を引揚げ船といいます。このとき最初の引揚げ船が別府に着いたことは案外知られていません。

昭和20年(1945年)9月2日に京都府の舞鶴港を出港した病院船「高砂丸」は、南太平洋のメレヨン島(現在のウォレアイ環礁)の兵士1628名を乗せ、9月25日に別府湾に帰ってきました。日出沖で3日



▲ 引揚げ船 高砂丸

間停泊した後の28日8時から12時まで全員が別府港に上陸しました。

港では地元の婦人会などがお茶を出し、苦労をねぎらいました。兵士たちはその後別府温泉に入浴して、それぞれの故郷へ帰っていきました。

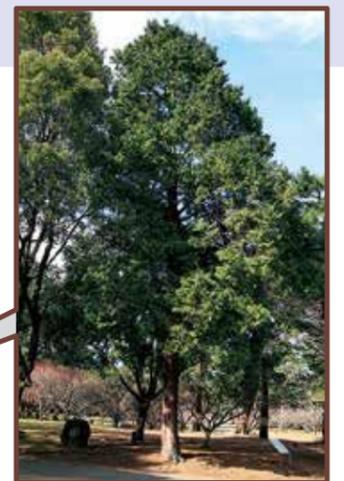
キャンプ・チッカマウガ

現在の別府公園 地図P62 G-1



高砂丸が別府に入港してから10日ほどした昭和20年10月4日、アメリカの進駐軍が大分に着きました。翌年の3月には別府市公会堂に、「占領軍工事大分地区兵舎宿舎建設本部」が設置され、アメリカ軍のキャンプ(軍隊がいるところ)の建設工事が始まりました。

現在の別府公園から旧別府商業高校のあたりまでの約43万6600平方メートルの土地に兵舎や教会、学校などが急ピツ



▲ チッカマウガ・ツリー 進駐軍によってクリスマスツリーとして植えられたヒノキ。

チで建設され、12月には完成しました。

このキャンプは石の多い地形が、アメリカのジョージア州の南北戦争の激戦地であったチッカマウガに似ているので、「キャンプ・チッカマウガ」と呼ばれました。

このキャンプには昭和31年7月までアメリカ軍が駐留しました。

油屋熊八 その1

文久3年(1863年)ー昭和10年(1935年)

JR別府駅の正面に、温泉マーク入りのマントを付けて両手をあげて立っている銅像の人物こそが「別府観光の父」と呼ばれている油屋熊八です。

熊八は、愛媛県宇和島市に生まれ、活動の拠点を大阪・東京に移してからも、様々なアイデアを駆使した商売が的中して、油屋将軍と呼ばれるようになりました。その後、日清戦争が勃発し、その影響で株が大暴落して大損をしました。

すぐに立ち直りのきっかけをつくりたいとの思いからアメリカに渡り、いろいろな勉強をしました。アメリカからの帰国後は、これからの自分の活動場所は豊富な観光資源がある別府温泉であると決めて「旅人をねんごろにせよ」との聖書の言葉を実践するために明治44年(1911年)に別府で亀の井旅館をはじめました。

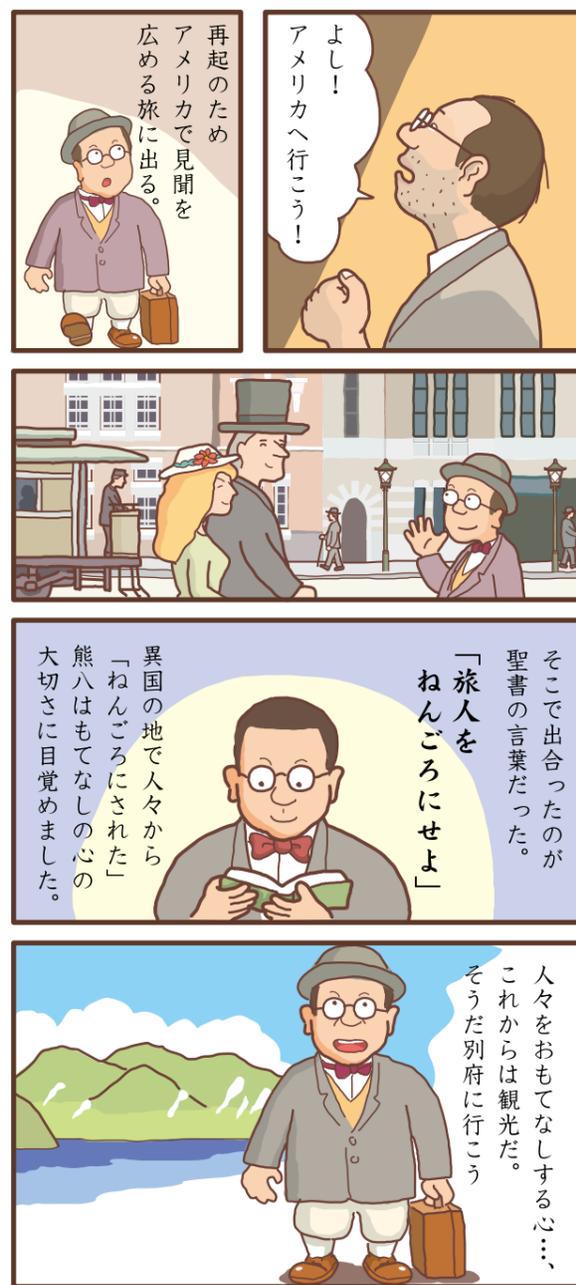


▲ 別府駅前の油屋熊八像
地図P62H-1

熊八さん、どんな人?
油屋熊八は大分県・日本観光の祖(先覚者)と呼ばれています。熊八は文久3年(1863年)に愛媛県宇和島市の米問屋の家に生まれ、大阪やアメリカで働いた後に、49歳のときに別府に移り住み、いろいろなアイデアで観光事業を経営した実業家です。



▲ 亀の井旅館



熊八さん、「旅人をねんごろにせよ」ってなに？

熊八は、客を食事や寝具等で手厚くもてなしホテルの評判を高めました。クリスチャンであった熊八は「旅人をねんごろにせよ」(旅人を丁寧におもてなしせよ)という聖句を座右の銘として常に客に接しました。



油屋熊八 劇場

「おもてなし」の元祖

油屋熊八 その2

文久3年(1863年)ー昭和10年(1935年)

その後、業務を拡張し亀の井ホテルの取締役社長に就任しました。

熊八には、別府温泉宣伝協会の活動を支援してくれる梅田凡平や宇都宮則綱等の多くの仲間がいました。熊八は、まだ有名で

はなかった別府を有名な観光地にしようと、「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチフレーズを考え、富士山をはじめ全国各地に標柱を立てて湯の町別府を宣伝しました。



▲ 明治時代の別府



熊八さん、日本一の観光宣伝上手！

熊八は、まだ有名でなかった別府温泉を全国へ宣伝したいと考えました。そして「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチコピーを考案して、大正14年(1925年)に富士山頂に標柱を設置して別府温泉を宣伝しました。

熊八さん、九州横断道路の構想は？

熊八は、昭和2年(1927年)に他県からの観光客を増やすために大分・熊本・長崎三県を連結する九州大国立公園実現(現九州横断道路構想)

を主唱しました。昭和39年(1964年)に九州横断道路が全線開通し、熊八の夢は叶いました。



▲ 開通当初の九州横断道路 地図P61 F-2

熊八さん、別府温泉が「日本新八景」で日本一に？

昭和2年に大阪毎日・東京日日新聞主催で「日本新八景」選定の募集が行われました。別府温泉は熊八らの努力によって「温泉の部」で日本一に選ばれ、これをきっかけに全国から多くの観光客が訪れるようになりました。



▲ 別府を訪れたヘレンケラー 昭和12年(1937年)、右から3人目



◀ 昭和初期の北浜砂湯

別府温泉は日本一

「日本一の別府温泉」という言葉を皆さんはよく聞くとお思います。なぜそう言われるのか探っていきましょう。

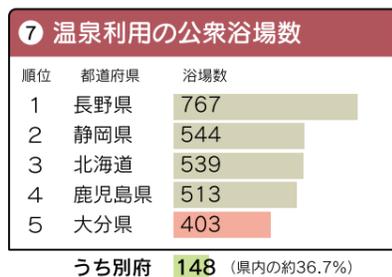
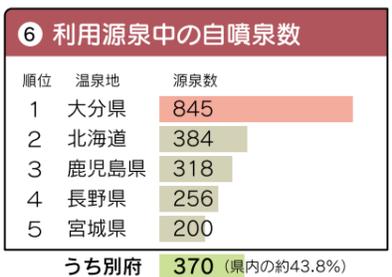
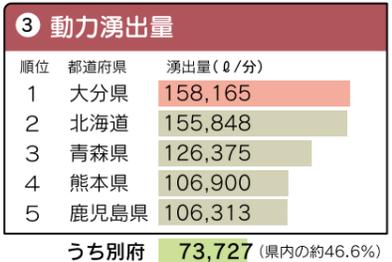
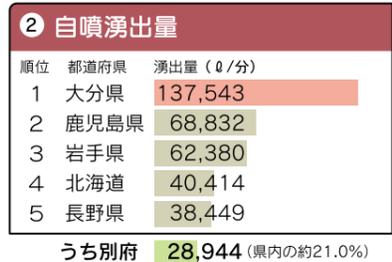
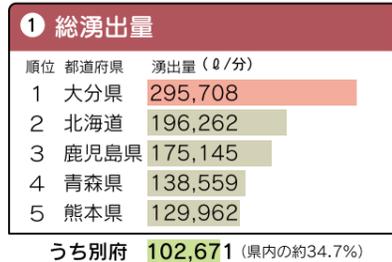
全国には2800ヶ所以上の温泉地があります。

まず、湧出量を見てみましょう。湧出量は1分間に湧出する量で比較します。全国では、毎分約252万リットルの温泉が湧出しています。そのうち大分県では約29万6000リットルが湧出しており、これは全国の約11.2パーセントにあたり、全国1位です。別府の湧出量は約10万2000リットルで、大分県の約34.7パーセントを占めています。

また、源泉数（温泉が湧出するところ）

ですが、全国には約2万8000ヶ所の源泉があります。大分県では、5090ヶ所あり、これは全国の約18.2パーセントにあたり、全国1位です。別府の源泉数は2839ヶ所で、大分県の約55.8パーセントを占めています。源泉数2位の鹿児島県の2738ヶ所を上回っていることから、別府は日本一の源泉数と言えます。

その他の部門でも、「温泉利用の公衆浴場数」や「年度延べ宿泊利用人員数」を除いて、全てが全国1位が大分県となっています。



※表の数字は「温泉利用状況」(環境省)「温泉利用状況報告書(総括表)」(大分県) (ともに令和5年3月31日現在)より

温泉の色

別府温泉の温泉や地獄にはさまざまな色があります。どうしてこのような色になるのでしょうか。



赤色で有名な血の池地獄の温泉水は実は無色です。赤く見えるのは池にたまる沈殿物(泥)の中に含まれる鉄分(赤鉄鉱)によるものです。豊後国風土記には、この泥を柱に塗っていたということが記されています。



海地獄やかまど地獄など青色の地獄や温泉が別府にはいくつかあります。これは高温の温泉水の中に含まれるシリカ(珪酸)という物質の粒子が光に反射し青く見えるためで、温泉水自体は無色です。この粒子が集まって大きくなると、青色には見えなくなります。



シリカが青色に見えるときよりもさらに大きな粒子になると、白色に変わってきます。白池地獄などが白く見えるのはこのためです。



紺屋地獄などが黒または黒灰色に見えるのは、地獄の泥に含まれる黄鉄鉱によるものです。豊後国風土記に出てくる玖倍理湯が黒いと記されているのは、このためだと考えられています。

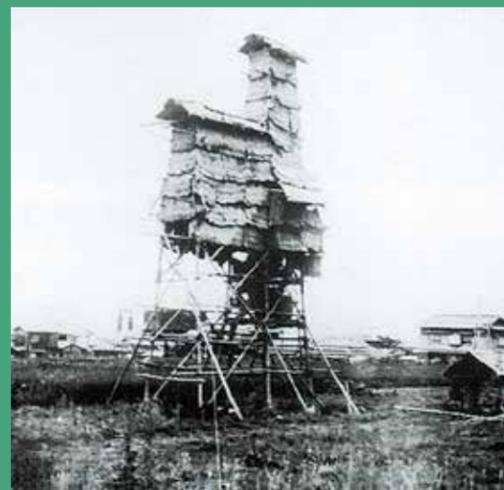
かずさほ 上総掘りと温泉

いどほ 別府を発展させた井戸掘り技術

かつて「一夜千両のお湯が湧く」と歌われた泉都別府は、令和5年3月31日現在、2839カ所の源泉数と毎分約10万2千リットルあまりの温泉湧出量を誇り、いずれも日本一となっています。しかし、この豊かな温泉は、上総掘りという技術なしではありえなかったのです。上総掘りとは、

近世中期から上総国(千葉県君津地方)で開発された掘り抜き自噴式井戸の井戸掘り技術です。明治20年(1887年)代後半に完成した上総掘りの技術は全国に急速に広がり、新潟県の油田開発や、石炭の試掘にまで利用されました。

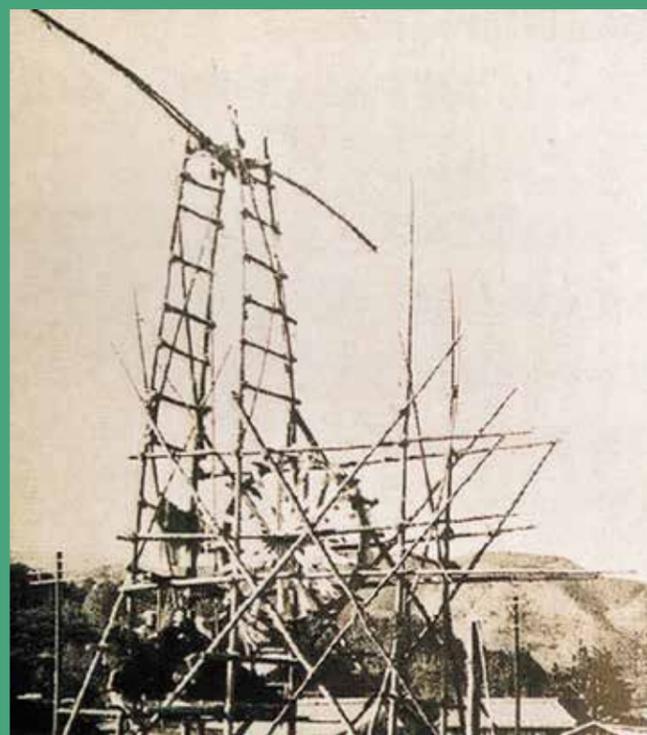
この技術は別府に伝わり、温泉の源泉掘削技術として独特の発達をとげます。明治9年(1876年)には自然湧出の源泉が31カ所しかなかったのに、明治44年(1911年)には自然湧出17カ所、突湯576カ所となります。この突湯こそ、上総掘りによる源泉なのです。現在は温泉資源の保護を考慮して約2500カ所の源泉が保たれています。



▲ 湯突き櫓(亀川温泉)



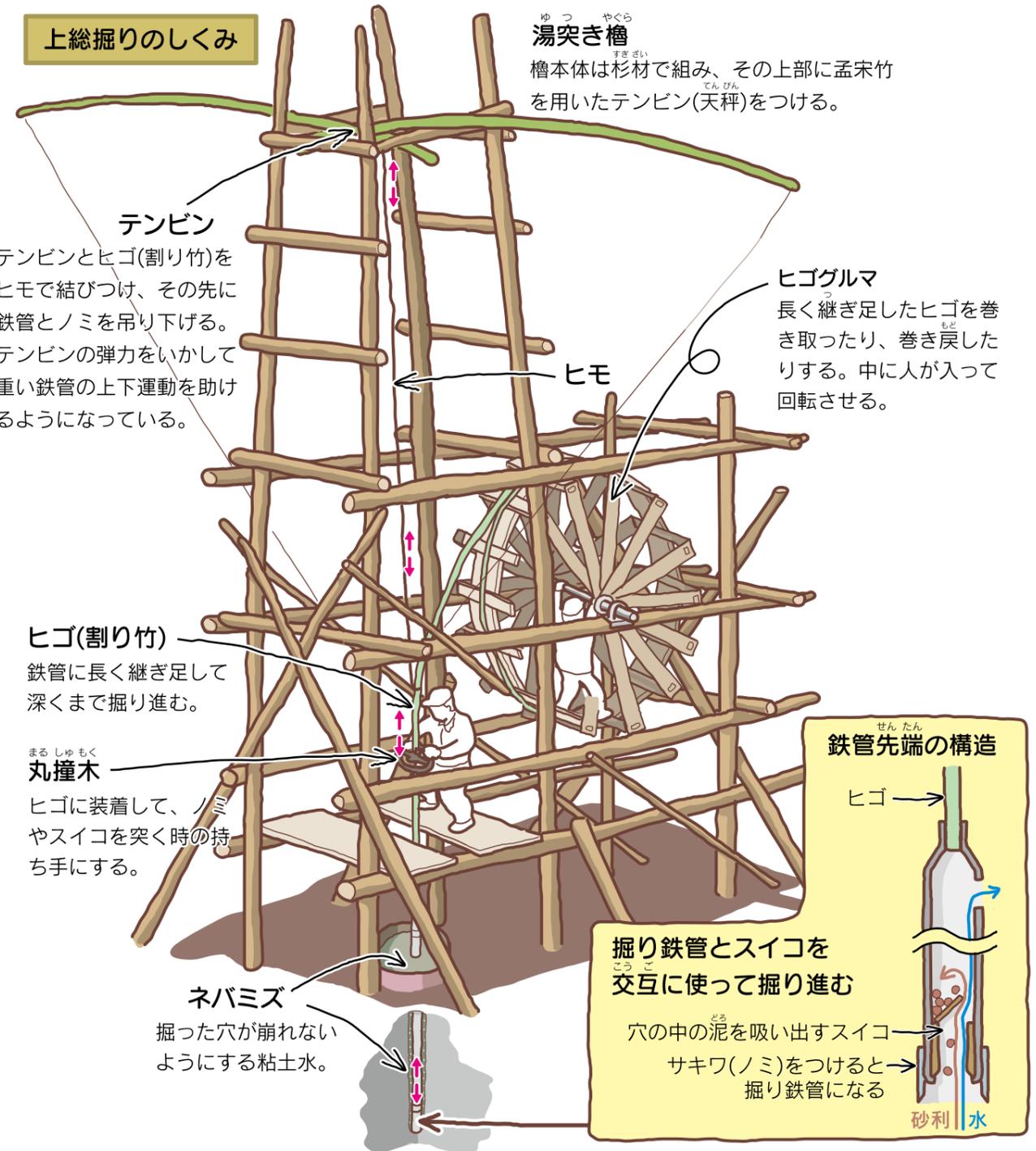
▲ 作業のようす



▲ 湯突き櫓(亀川温泉)

※令和2年3月、別府の湯突き用具が国の登録有形民俗文化財に登録されました。

上総掘りのしくみ



上総掘りの掘削法は、現在のボーリング工法のパーカッション(衝撃)法にあたります。ノミを土に打ち続けて、穴を掘っていくのです。現在のボーリング工法では動力によってビット(ノミ)を上下させますが、上総掘りではノミの重量と人力で地を突き、孟宋竹のテンビンの復元力を

用いてノミを引き上げます。深く掘り進むに従って竹ヒゴを継ぎ足し、穴から引き上げる時にはテンビンからヒゴグルマに付け替えて巻き取ります。昭和30年代にボーリング工法が導入されるまで、別府の温泉は上総掘りが支えていたのです。

生物多様性保全の取り組み

レッドデータブックと希少野生動植物

レッドデータブックは地球温暖化や大気汚染など地球環境の劣化によって、多くの生物が絶滅の危機に瀕している。その状況を調査した報告書です。植物については平成元年(1989年)日本自然保護協会と世界自然保護基金日本委員会が、動物については平成3年(1991年)環境庁が報告したのが始まりです。大分県では平成13年(2001年)に「レッドデータブックおおいた」を作成し、個々の種について選定基準(カテゴリー)を示し、10年ご

とに見直しをおこなっていくことになっています。

ここでリストアップされた種の中から、県では特に野生絶滅の危険性が高く緊急に保護の必要性のある種について「大分県希少野生動植物保護に関する条例」を制定して保護しています。

令和5年現在、植物31種、動物17種が指定され、別府市内では植物のヒメユリ、オキナグサ、フクジュソウ、ヒゴタイ、動物ではオオウラギンヒョウモン、オンセンミズゴマツボが確認されています。



多様な生物が保全された猪の瀬戸湿原
地図P58 A-3

生物はどの地域にも一様に分布しているわけではなく、多様な生物を包蔵する地域があり、平成12年(2000年)「科学雑誌ネイチャー」にマダガスカルやニューカレドニア地域など25地域を「生物多様性ホットスポット」として発表しました。平成17年(2005年)、新たに日本列島など9か所が追加され、2016年から36か所の生物多様性保全のためのホットスポットが存在しています。

多様な生物が保全された猪の瀬戸湿原一帯

別府市内でホットスポットを設定するならば、「猪の瀬戸湿原と湿原を取りまく由布岳、鶴見岳の山岳地帯」があげられるでしょう。

この地域には約1000種の植物と、それらを餌にする昆虫、野鳥などの動物が生息し、バランスの取れた生態系を維持しているからです。

湿原では生命維持に欠くことのできない水が山岳地からの伏流水によって供給され、春にはサクラソウ、ヤマシャクヤク、夏から秋にかけてはオタカラコウ、アケ

ボノソウ、シラヒゲソウが咲き乱れ、自然の花園が展開されていきます。最近、自然保護団体の手で環境整備がなされ立ち寄りやすくなりました。

現在、地球上にいる生物は推定で1000万～1億種まで諸説がありますが、ニッポンカワウソやニホンオオカミ、トキのように近年多くの生物が地球上から姿を消している現実があります。種の消滅は豊かな自然と生物の多様性を危うくし、やがては永遠に自然の恵みを喪失してしまうこととなります。

※令和元年度に猪の瀬戸湿原が別府市生物環境保護地区に指定されました。

レッドリストのカテゴリー (環境省や大分県が採用している基準)

絶滅	すでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅	飼育、栽培下でのみ存続している種
絶滅危惧 I A類	ごく近い将来、野生での絶滅の危険性がきわめて高い種
絶滅危惧 I B類	I A類ほどではないが、近い将来、野生での絶滅の危険性が高い種
絶滅危惧 II類	絶滅の危険性が増大している種
準絶滅危惧	現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性がある種
情報不足	評価するだけの情報が不足している種

別府市内に生きる大分県指定希少野生動植物



ヒメユリ(ユリ科)
大分県 I A 環境省 I B



フクジュソウ(キンポウゲ科)
大分県 I A 環境省



オキナグサ(キンポウゲ科)
大分県 II 環境省



ヒゴタイ(キク科)
大分県 I B 環境省 II



オンセンミズゴマツボ
大分県 I A 環境省



オオウラギンヒョウモン
(タテハチョウ科) 大分県 I B 環境省 I

※1 レッドデータブック…初めて発行した報告書の表紙に赤い紙が使われたことからこの名があります。

※2 ニッポンカワウソ、ニッポンオオカミは既に絶滅。
※3 トキ…日本の野生種は消滅

ぜつ めつ 絶滅の危機にある生物

別府市内で絶滅が危惧されている種

(1) 山地の植物 (盗掘や岩場の崩壊などで絶滅の危機を生じている)



▲ ヤマオダマキ (キンポウゲ科) 大分県 I B 環境省なし



▲ ユキワリイチゲ (キンポウゲ科) 大分県 II B 環境省なし



▲ イヨフウロ (フウロソウ科) 大分県準 環境省なし



▲ イワカガミ (イワウメ科) 大分県準 環境省なし

(2) 火山性草原の植物 (野焼きの停止や牧野改変による生育地の消失で絶滅の危機にある)



▲ キスゲ (ユリ科) 大分県準 環境省なし



▲ エヒメアヤメ (アヤメ科) 大分県 I B 環境省 I B



▲ タンナトリカブト (キンポウゲ科) 大分県 II B 環境省なし



▲ キスマレ (スマレ科) 大分県 I B 環境省 I B



▲ キキョウ (キキョウ科) 大分県 I B 環境省 II



▲ マツムシソウ (マツムシソウ科) 大分県準 環境省なし

(3) 湿地の植物 (土地の開変や流水の変化で消滅の危機にある)



▲ ノハナショウブ (アヤメ科) 大分県準 環境省なし



▲ シラヒゲソウ (ユキノシタ科) 大分県 II 環境省なし



▲ モウセンゴケ (モウセンゴケ科) 大分県準 環境省なし



▲ サクラソウ (サクラソウ科) 大分県 I B 環境省 II B



▲ サワギキョウ (キキョウ科) 大分県 II B 環境省 II



▲ チョウジソウ (キョウチクトウ科) 大分県 I A 環境省 II

(4) 里地の植物 (人の採取や開発行為で絶滅の危機を生じている)



▲ フウラン (ラン科) 大分県 I B 環境省 II



▲ キンラン (ラン科) 大分県 II 環境省 II

絶滅の危機にある生物

日本の生物多様性の特徴

日本は北半球の北緯20度から45度の中緯度に位置し、南北約3,000kmにわたり数千の大小さまざまな島しょが細長く連なる島国で、温暖湿潤気候を主とした気候帯により四季の変化を有しています。国土の約3分の2を森林が占め、海岸から山岳まで標高差の大きい複雑な地形が広がることで、幅広い生態系を形成しています。こうした多様な自然環境が多く、種を生み、現在、知られている種だけで9万種以上、未知の種も含めると30万

種を超える生物が存在すると推定されています。特に、日本にだけ存在する固有種の比率が先進国の中では極めて高く、陸にすむ哺乳類の約4割、両生類の約8割が固有種とされています。

こうした豊富な自然がはぐくんだ生物の多様性も、人の活動や開発により自然破壊が進み、日本に生息する爬虫類、両生類、汽水・淡水魚類の3割強、哺乳類の2割強、鳥類の1割強に当たる種が絶滅危惧種となっています。

別府市内で絶滅が危惧されている野生動物たち

海岸・海浜地域では、かつてルイスハンミョウなどの海浜性昆虫が生息していましたが、現在は確認されていません。背後地にある未開発の汽水域にはタケノコカワニナ、オカミミガイなどの希少な貝類が生息しています。



▲ タケノコカワニナ
大分県ⅠA 環境省Ⅱ

扇状地・里山地域では、市街化が進み動物種の減少が続いていますが、里山環境が残るところでは里山地域から高原地域にかけてオオイタサンショウウオ、ニホンイシガメなどの希少種も生息しています。



▲ オオイタサンショウウオ
大分県Ⅱ 環境省Ⅱ



▲ ニホンイシガメ
大分県準 環境省準

大分県の絶滅のおそれのある野生動物

大分県では、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類・頭索類、昆虫類、大型水生甲殻類及び陸・淡水産貝類の約940種のうち、510種が絶滅のおそれのある種とされています。（「レッドデータブックおおいた2022」より）

別府市では、独自の調査ではありませんが、哺乳類9種、鳥類28種、爬虫類1種、両生類3種、昆虫類40種、クモ形多足類6種、陸・水生産貝類9種の計96種の希少野生動物が絶滅のおそれがあるとされています。（「べつぶの文化財No.46-別府に生きる希少野生動物植物-」より）



▲ フクロウ
大分県Ⅱ 環境省なし



▲ ニホンヒキガエル
大分県準 環境省なし



▲ カヤネズミ
大分県準 環境省なし

高原地域では、ケブカヒラタカミキリやウラミスジジミなど希少な草原性昆虫も生息していることから現時点ではまだ良好な環境を維持できているといえます。高原地域の湖沼や湿地にはコオイムシ、サシバなどの希少動物が生息し、重要な地域となっています。



▲ ウラミスジジミ
大分県Ⅱ 環境省なし



▲ コオイムシ
大分県Ⅱ 環境省準

山地地域では、阿蘇くじゅう国立公園内に位置する地域も含まれていることから、未開発のところにおいてはモンクロベニカミキリ、オオムラサキやサンショウクイなどの希少な森林性動物が生息しています。



▲ オオムラサキ
大分県Ⅱ 環境省準



▲ モンクロベニカミキリ
大分県ⅠB 環境省なし

絶滅の危機にある生物

別府市街地で絶滅した動物たち

別府の市街地は都市化が進み、下記の動物たちはここ30年で絶滅した可能性が高いと考えられています。現在、地球上の種の絶滅のスピードは化石記録から推定される過去の平均値の1000倍にも達しているといわれています(4万種/年)。



◀ ルイスハンミョウ
大分県ⅠB環境省ⅠB
かつては関の江海岸の砂浜に生息していましたが、近年確認されていないため、絶滅した可能性が高いと考えられます。

カブトエビ▶

かつては朝見川水系の水田にアメリカカブトエビが生息していましたが、水環境の悪化により絶滅した可能性が高いと考えられます。(写真はアジアカブトエビ)



▲ トノサマガエル 大分県Ⅱ環境省準
水田等が減少し河川でも生息できる場所が減っているため、絶滅した可能性が高いと考えられます。



◀ キクガシラコウモリ
大分県準 環境省なし
ねぐらとする洞窟等が減少したことにより目撃されていないため、絶滅した可能性が高いと考えられます。

コラム バイオミミクリー

自然や生物のしくみに学び、その構造や機能を模倣し、新しい技術を開発することを意味する語で、「バイオミメティクス」とも言い、日本語では「生物模倣」などと訳されます。

46億年という地球の長い歴史の中で、自然界では色々な生物が環境に応じて様々な変化を遂げて、現在の形態をつくりあげてきました。私たちの身近な自然や生物の中にも色々な工夫があり、不思議なしくみが隠されています。その代表的な例として、「ハスの葉」をヒントにして作られた水を反発する素材や、「クモの糸」で作られた強靱な繊維などを挙げることができます。



▲ ニホンヤモリ

ヤモリの足の裏には、1本の足に50万本という細毛が生えていて、その毛の先端が100~1000本に枝分かれています。この毛で体を支えて貼り付くことができるのです。垂直歩行できる車型ロボットの開発に応用されています。

コラム 外来種問題

外来種とは、従来は生育・生息していない地域に、他地域から人為的に持ち込まれた生物のことです。この外来種の取扱いを規制した法律は平成16年(2004年)に成立しました。法律では、海外起源の生物で生態系、人の生命や身体もしくは農林水産業に被害を及ぼすおそれがあるものが132種(平成28年(2016年)10月1日現在)指定されています。指定された生物は原則として飼育、栽培、保管及び運搬が禁止されています。また、野外へ放つことや植えることなども禁止されています。

大分県内でも、アライグマをはじめソウシチョウ、アカミミガメ、ウシガエル、オオクチバスなどの外来種が問題となっています。

別府市の河川では、グッピーが増え、今ではテラピアも多く見られます。ウシガエルが侵入したり、山地地域ではソウシチョウがさえずることが多くなりました。



▲ アライグマ



▲ ミシシippアカミミガメ



▲ ウシガエル



▲ ナイルテラピア



▲ グッピー



▲ ソウシチョウ

特定外来生物アライグマとタヌキの違い

別府市では平成22年以降アライグマの目撃例はありませんが、隣の大分市では捕獲数が増えています。

タヌキ



黒い縁取り



足跡はイヌに似ている



尾は短くしまはない

アライグマ



耳が大きくて白い縁取り



指が5本で長い



尾は長くてしましま

別府市域の発展

今の別府市はこうして広がった

別府市の場所は、かつては豊国と呼ばれていました。



7世紀末 に律令制度がつけられると、豊後と豊前に分かれ、別府は豊後に属しました。豊後には8つの郡こおりがあり、そのひとつに速見郡はやみがありました。速見郡は、現在の別府市のほぼ全域と日出町、杵築市、由布市の一部の区域でした。

郡の中には、いくつもの村ができました。この村は、地域の人々が集まって自然にできた村で、できた年代はさまざまですが、江戸時代の終わりごろには、別府村、浜脇村、朝見村、鶴見村、石垣村、亀川村、内竈村など、だいたい24ほどの村がありました。



明治8年(1875年)

江戸時代の村は、明治時代に引き継がれた後、明治8年(1875年)には、14村に統合されました。



明治22年(1889年)

に市制・町村制が実施されると、南端村(現在の天間など)、平道村(小坂など)、御越村(内竈、亀川、野田)、朝日村(鉄輪、鶴見)、石垣村(北石垣、南石垣、東山、立石)、別府村、浜脇村の7村になりました。

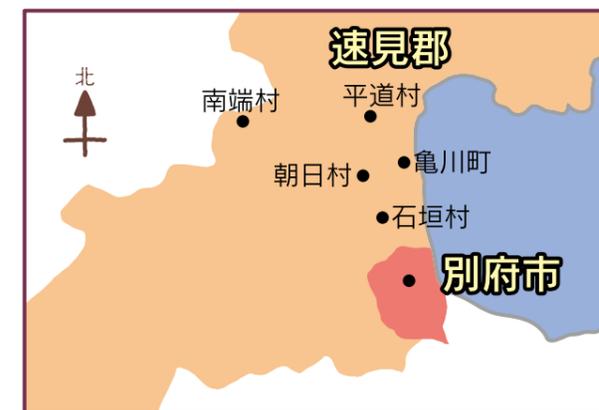
その後御越村、別府村、浜脇村はそれぞれ「村」から「町」になりました。



▲市制施行祝賀行事のアーチ

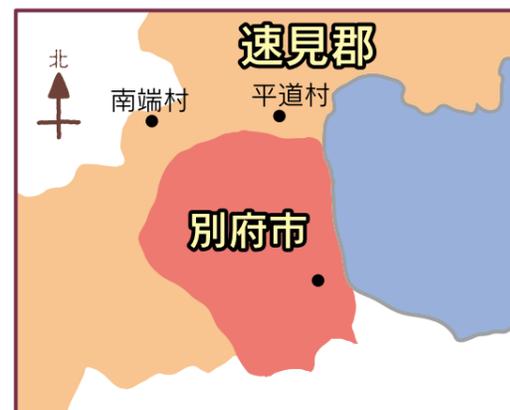
大正13年(1924年) 市制施行

さらに別府町と浜脇村が合併し、新しい別府町となり、大正13年(1924年)に市制施行により「別府市」が誕生しました。「市」としての歴史はこのときから始まります。その翌年には御越町は亀川町に名称変更しました。



昭和10年(1935年)

亀川町、朝日村、石垣村と合併し、文字通りの大別府市となりました。

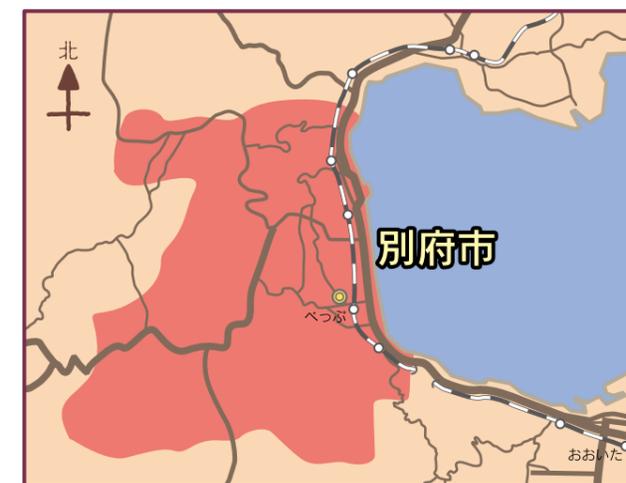


▲埋め立て前の的ヶ浜海岸

昭和31年(1956年)

天間と日出町の一部、挟間町の内成を編入し、現在の市の区域が出来上がりました。

その後は市の区域に変更はないものの、的ヶ浜公園、餅ヶ浜、亀川などの埋め立てにより、市の面積は少しずつ拡大しています。



つる み しち とう の き
鶴見七湯廻記 (大分県立歴史博物館 所蔵)

鶴見七湯廻記に見る風俗

鶴見村は慶長6年(1601年)に豊後森(玖珠町)の城主久留島康親の領地になり、北中と原中に分かれました。

『鶴見七湯廻記』は、弘化2年(1845年)に領主の通嘉が小倉に照湯の湯を建てた際に、もと北中の庄屋だった直江雄八郎こと寺社奉行伊島重枝に文を、江川吉貞に絵を書かせた折本仕立の画帳です。この画帳からは、七つの温泉、名所旧跡や特産物、風俗を知ることができます。

宮地の湯(玖倍理湯)

七湯のうち、神社の森に湧く宮地の湯は、『豊後国風土記』にでる玖倍理湯といわれています。

明礬山や登備の湯は硫黄泉で皮膚病に効きめがあります。

農民は一日の耕作に励んで入浴して家に帰ると、筋骨が和らぎたちまち疲れがとれる。朝晩入浴する農民は無病で長寿であると書かれています。



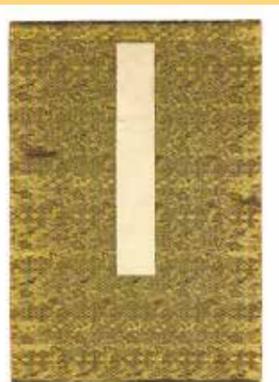
▲ 宮地の湯

照湯の湯

照湯の湯は、祓川の氾濫で荒廃していましたが、天保13年(1842年)に藩主の通嘉により、浴場、蒸湯、飛泉(滝湯)などの温泉が設けられました。そのほか上級武士の宿屋や浴場、赤い欄干を廻らせたお茶屋、宿屋などの建物がそろった本格的な温泉地でした。



▲ 照湯の上級武士が使う温泉



◀ 鶴見七湯廻記(表紙)

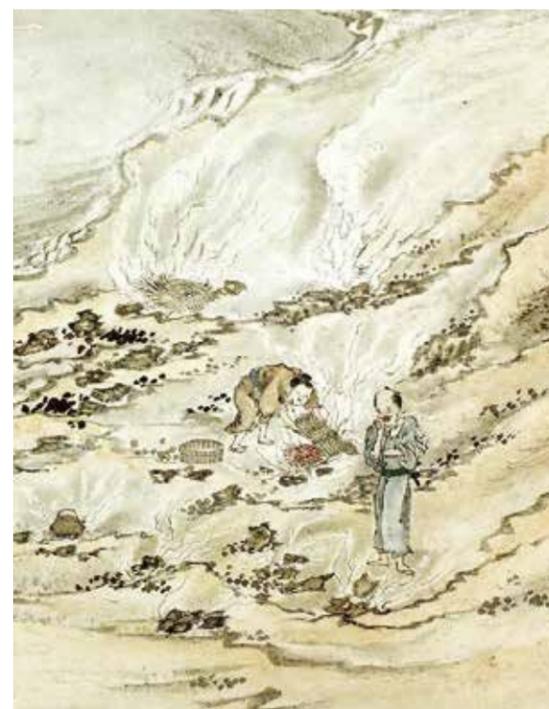
農民の入浴は無料で、人々は玖珠から江戸に向かう参勤交代の港であった頭成村(日出町)へ通じる玖珠道を経て湯治にきました。殿様も照湯に入湯すれば江戸で風邪を引かないと、参勤交代の途中に立ち寄ることがありました。

園内坊主地獄

名所では地獄を取り上げています。昔、欲深い僧がいて人に施し憐れもなく財をむさぼり、非道の行いを重ねていたところ、突然地獄が湧き出して一夜にして僧は財とともに呑み込まれ、そこが坊主地獄になったと伝えています。

地獄蒸し

今井の地獄では、農民が地面の噴気を利用して自然の竈にしたことなどが描かれています。



◀ 坊主地獄



▲ 園内坊主地獄



雨乞い

雨乞いは、神主や村人が潮汲みに行き、大平山(扇山)山頂にある八大竜王の石像に供えるため、夕方から大勢で幟を先頭に、手に手に松明を持ち、太鼓を打ちならし竹貝を吹いて登りました。山頂では天をも焦がす大火を焚き、山も震動するほど声をあげて踊り騒ぎました。

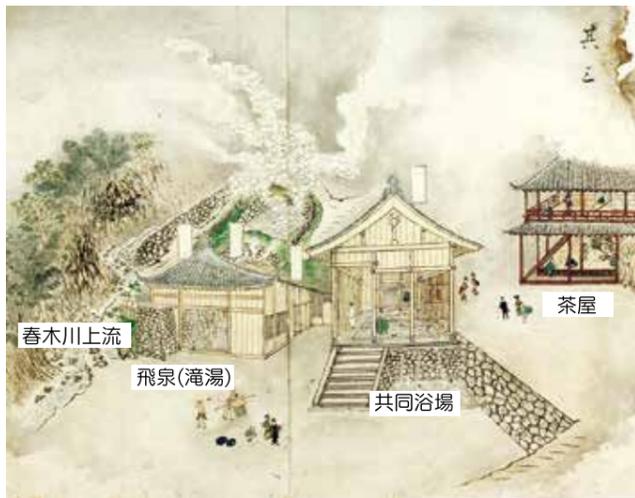
「大平山雲」では「雨の降らざること無し」と書かれています。早魃の年には杵築や佐賀関からも、雨乞いの火が見えたら田植えの準備をしたそうです。

江戸時代後期の温泉の様子

別府は幕府領で穏やかな温泉場でした。江戸時代の後期になると庶民は庄屋から往来手形を書いてもらい自由に旅が出来るようになりました。庶民は休養と娯楽を求めて温泉地に集まってきました。

小倉から大分に通じる豊前道が別府を南北に通り、亀川や別府、浜脇には港があって交通にめぐまれていました。

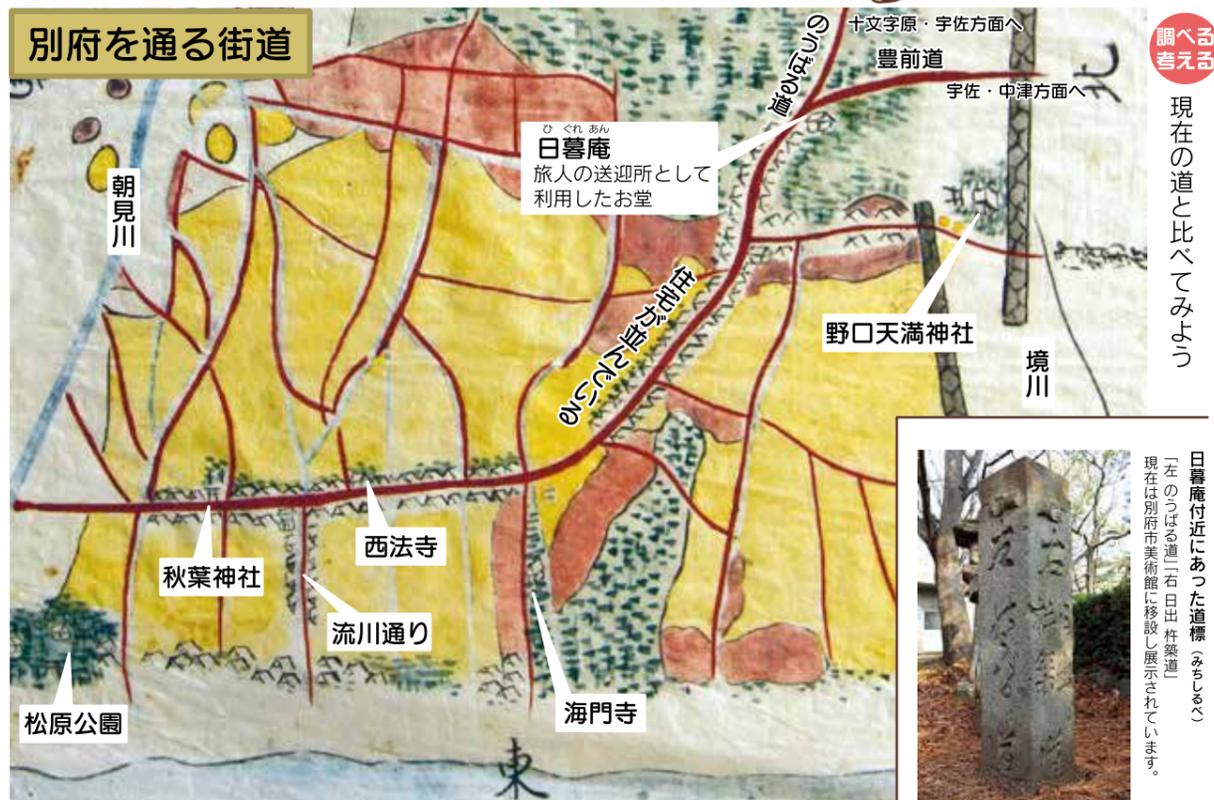
別府の温泉は、病を癒し皮膚病を治す効果があるので、多くの人を訪れました。秋の農閑期などは農民がおしかけ、何日も滞在して治療をしました。このような温泉地を湯治場といました。温泉は共同浴場が主で、湯治客は自由に入浴ができました。



▲ 照湯の温泉場「鶴見七湯廻記」 地図P61 D-1



▼ 別府村絵図天保7年(1836年)



湯治宿には、食事付きで滞在できる旅籠や宿屋から部屋と布団だけを借りて自炊をする木賃宿や自炊をしながら長期滞在できる間借がありました。



港がある湯治場には、食料などを積んだ漁船を港に繋いで自炊しながら入浴する湯治船が押しかけました。



入浴客が増えると色々なお店ができて賑やかな町になりました。別府と浜脇が接する松原には芝居小屋ができ、鉄輪の入湯客は地獄見物を楽しみました。



江戸時代の末に出された湯治場の全国温泉効能番付に浜脇温泉が西方前頭三枚目、別府温泉が前頭六枚目にあげられています。

やなぎ はら びやく れん
柳原白蓮 明治18年(1885年)~昭和42年(1967年)
あか がね ご てん

白蓮と赤銅御殿

柳原白蓮は、本名を柳原^{あきこ}燐子といい、明治18年(1885年)に、父柳原前光^{はくしゆく}伯爵、母奥津^{おくつ}りょうの子として東京で生まれました。白蓮というのは、雅号(ペンネーム)です。ここでは、燐子と記します。

歌人で国文学者の佐佐木信綱^{ささきのぶつな}の教えを受けた燐子は、多くのすぐれた短歌を詠み、歌人として有名になりました。

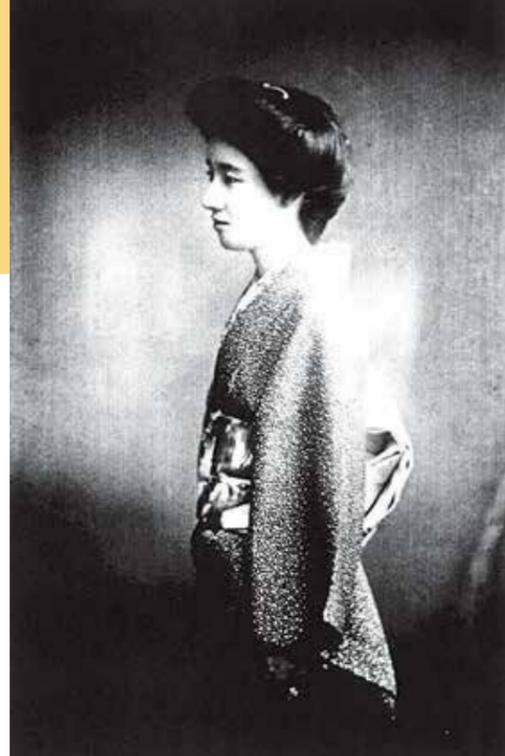
明治44年(1911年)、26歳^{さい}のときに筑豊^{ちくほう}の炭鉱王と呼ばれた伊藤伝右衛門^{いとうでんえもん}と結婚^{こん}しました。伝右衛門は白蓮よりも25歳も年上でした。

伝右衛門は、現在の福岡県飯塚市^{いづか}の出身で、父伝六は小さな炭鉱業を営んでおり、それを引き継いだ伝右衛門は炭鉱業を大きく発展させ、炭鉱王とまで言われるようになりました。

伝右衛門は、飯塚市の約7500平方メートルの土地に、京都などから一流の宮大工や庭師を招き、延べ床面積約712平方メートルの木造の2階建て純和風の新居を建てました。



福岡県飯塚市にある伊藤伝右衛門邸は一般公開されています。



▶ 柳原白蓮

さらに伝右衛門は燐子のために、別府にも別荘^{べつそう}を建てることにしました。大正5年(1916年)に、和風の別荘を建てました。場所は、現在のべつぷアリーナの南側です。

建築に使う木材は、全国から最優秀^{さいゆうしゅう}のものが集められ、家具は京都から購入^{こうにゅう}しました。各部屋の扉はヒノキの一枚板で、阿部春峰^{あべしゅんほう}という高名な画家が半年かけて壁画^かを描き上げました。庭園は、大楠や老松^{とうろう}、灯籠^{とうろう}を配置し、別府湾や高崎山^{わん たかさきやま}を背景にしたとても素晴らしいものでした。

内部は、6畳の玄関^{げんかん}に続き、主人の間、夫人の間、食堂、女中部屋、コック部屋、茶室^{ちかむろ}、控室^{ひかえしつ}などがあり、さらには3ヶ所

の温泉浴室^{おんせんゆすい}がありました。本宅を上回る豪華な建物で、「伊藤別荘^{いとうべつそう}」と呼ばれていました。燐子はこの別荘で過ごすことが多く、多くの歌人と交流していました。

赤銅御殿復元図



敷地 約10700平方メートル
建物 約936平方メートル

赤銅御殿 ▶

大正10年(1921年)、二人は離婚^{りこん}しました。その後伊藤別荘は伊藤家によって管理されていましたが、戦時中に海軍に寄付をしました。当時の金額で伊藤別荘の価値は187万円といわれました。

戦後になり、民間に買い上げられ、昭和29年(1954年)から「ホテル赤銅御殿」として利用されましたが、昭和54年(1979年)に惜しまれながら取り壊^{こわ}されました。



見てみよう

◀ 赤銅御殿跡の白蓮の歌碑

和田津海の 沖に火燃ゆる 火の国に
我あり誰そや 思はれ人は

(青山児童公園) 地図P61 F-4

赤銅御殿があった場所は現在、住宅地になっており、小さな公園の中に昭和29年に建てられた歌碑だけが昔の面影^{おもかげ}を伝えています。

別荘文化

中山別荘・麻生別荘・国武別荘・山田別荘・田の湯館

別府市には大正時代から昭和初期にかけて多くの別荘がありました。

福岡県の炭鉱会社の社長や財界で名を成した人の別荘など、多いときには別府駅か

ら山の手、亀川方面にかけて145軒もの別荘がありました。ここでは、現在も残されている別荘や近年まで残されていた貴重な別荘を紹介します。

中山別荘 (旧和田別邸)

山の手ショッピングセンターがある場所は、中山別荘が建っていました。

富士紡績社長の和田豊治氏が大正9年(1920年)に建てた別邸で「致楽荘」と呼ばれていました。和田別邸は、のちに中山製鋼の創業者中山悦治氏に譲られ、その後和風部分を増築しました。洋館と数寄屋造りの和洋折衷の別荘は、大正ロマンを感じさせる建物でした。



麻生別荘

山の手町にありましたが、現在は住宅地になっています。

飯塚の炭鉱王麻生太吉の別邸として大正5年(1916年)に建てられ「紅紫迎賓館」と呼ばれていましたが、昭和2年(1927年)に火災に遭い、その後再建されました。堂々たる入母屋造り棧瓦葺平家建の建物は、筑豊御三家の一つである麻生家の格式を偲ぶことができました。



国武別荘 (現GAHAMA) 地図P61 F-1

上人ヶ浜公園の隣に旧国武別荘があります。久留米絨織の織元で財をなした国武金太郎が昭和2年(1927年)に別荘として建てたもので、戦後に九州電力が別府保養所として買収し増築しました。国武は、観海寺や荘園町を開発した人物としても知られています。もともとは和風建築で、洋館部分は増築したものです。現在はホテルとして利用されています。



山田別荘 (静寿堂) 地図P61 F-3

広島県西高屋村(現東広島市)の村長や久住電気株式会社社長を勤めた山田英三氏が夫人の保養別荘として昭和5年(1930年)に建築したものです。

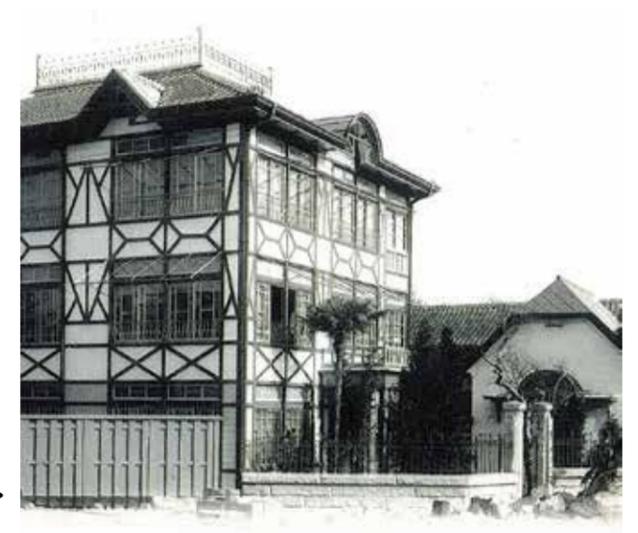
この和風の別荘建築は個性的な建物として、古き良き時代のロマンの香りを漂わせています。現在は旅館として利用されています。



田の湯館 (旧松永万八別荘)

別府市公会堂の前にありましたが、現在は取り壊されています。

鉄道の日豊線工事を手がけた松永万八が建てた洋風の木造3階建ての別荘です。別荘ですが、保養所的な機能も持っていました。



建築当時の田の湯館(別館) ▶

さまざまな文化財

文化財とは、日本の歴史や文化などを正しく理解するために必要な大切な財産のことです。これらのうち、特に重要なものを国、県、

市が、指定、選定、登録などの制度によって守られています。別府市にもさまざまな文化財がありますので紹介します。



▲ 遊行上人絵伝



▲ 小児甕棺



▶ 笠塔婆

有形文化財

建造物や絵画、工芸品など形のある文化財を有形文化財といいます。

建造物は主に石造と木造があります。特に別府市には、「龍門氏墓地五輪塔」や「笠塔婆」などのすぐれた石造物が数多くあります。木造物は、「経堂内に包蔵する輪蔵」と「東別府駅」の2件があります。

絵画は室町時代に書かれた「遊行上人絵伝」が国の重要文化財に指定されています。古文書としては、江戸時代の私塾の教科書である「対岳楼教則」や、「明礬関係史料」などがあります。

工芸品は、すべて刀剣で、太刀、脇差、短刀8点が指定されています。

そのほか、考古資料として弥生時代の「小児甕棺」、古墳時代の「須恵器」などがあります。

無形文化財

無形文化財は、工芸技術や演劇、音楽など形のないすぐれた技のことです。残念ながら別府市には指定されたものはありません。

民俗文化財

衣食住、生業、信仰、年中行事など身のまわりの生活に関連したものや伝統行事などを民俗文化財といい、道具など形のある有形民俗文化財と、形のない無形民俗文化財に分かれます。別府市では「別府明礬温泉の湯の花製造技術」が世界でただひとつの技術として、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

史跡、名勝、天然記念物

記念物には、史跡、名勝、天然記念物があります。史跡は古墳や城跡、貝塚などで、別府市では「鬼ノ岩屋・実相寺古墳群」が国の史跡に指定されています。

名勝は山岳や峡谷などの自然名勝と、庭園や橋などの人が造った人文名勝があります。「別府の地獄」が国、「由布川峡谷」が県の指定となっています。

天然記念物は動物、植物、地質鉱物などので、「鶴見の坊主地獄」や「鶴見権現社のイチイガシ林」、「龍巻地獄」などがあります。

文化的景観



▲ 別府の湯けむり・温泉地景観

また、新しい文化財の種類として文化的景観があります。鉄輪と明礬の湯けむり景観は、「別府の湯けむり・温泉地景観」として、全国の温泉地の景観としてはただひとつ選定されています。別府市民にとって見慣れた湯けむりの景観ですが、市の全域にわたって湯けむりが立ち昇っている景観は全国でも別府が最も優れているといわれています。この湯けむり景観を別府の宝として守っていかなければなりません。

登録有形文化財

文化財指定には至っていないが、建築後50年以上経過した貴重な建物で、リストに登録されたものを登録有形文化財といいます。

別府市には、大正時代から昭和初期にかけての「京都大学地球熱学研究施設」や「旧別府郵便電話局電話分室」、「竹瓦温泉」、「朝見浄水場」の各施設など貴重な建物が、数多く残されています。意外なところでは、「別府タワー」も登録有形文化財となっています。



▲ 別府タワー 地図P62 I-1

▼ 発掘調査



また、文化財の指定などではありませんが、地中に土器や石器、昔の住居の跡などが埋まっていることが知られている土地では、地面を掘ったりビルを建てたりするときには、事前に発掘調査をおこなうことがあります。

別府市中心部地図

地図(2) 別府市中心部地図



うちなり
内成のイチヨウ
(県特別保護樹木) 地図P58 C-4

内成の太郎丸地区に生育する雌木のイチヨウで、幹周り9メートル60センチ、高さ約30メートルもある巨木です。かつては「名木公孫樹」とも呼ばれ、皮を煎じて飲むと女性の病気に効果がとられています。



たなだ
内成の棚田 地図P58 C-4

標高200~300メートルの内成地区に点在する約1000枚の棚田で、面積は41.7ヘクタールです。江戸時代の初め頃から作られ始めたと考えられており、日本の棚田百選にも選ばれています。



きょうごく
由布川峡谷 (県名勝) 地図P58 B-4

大分川の支流である由布川が厚い凝灰岩の層を浸食してつくられた10キロメートル以上に及び峡谷です。飛瀑、深淵、甌穴、早瀬、チェックストーン(崖に挟まっている岩)など、渓谷美を満喫させてくれます。



観海寺の森 (市保護樹) 地図P61 D-3

観海寺温泉の北側に残るスタジオの自然林です。ほかにタブノキ、クログナモチ、ヤブツバキ、アオキなども茂り、古い時代にこの一帯に広がっていた自然の植生を知ることができます。



てるゆ
照湯 (市史跡) 地図P61 D-1

照湯は、森藩(玖珠町)の飛び地(離れたところにある領地)にあり、藩主久留島通嘉が天保15(1844)年に春木川沿いに造った温泉場です。湯船のほかに滝湯、蒸湯、茶屋などがありました。



みょうばん
別府明礬温泉の湯の花製造技術
(国重要無形民俗文化財) 地図P61 D-1

江戸時代に始まる明礬の製造方法を引き継いだ技術で、温泉の噴気を利用する明礬地区の方法は、ほかの温泉地では見られないものです。平成18年に民俗技術としては全国で初めて国指定となりました。



どうしょう
ラクテンチのケーブルカーの道床
地図P61 E-4

昭和4年に別府遊園地(ラクテンチ)が開園したときに造られたケーブルカーの石の軌道です。軌道の長さは253メートルで、傾斜の角度約30度は当時日本最大の傾斜といわれました。 ※写真は開通当時のもの



吉祥寺跡及び開山塔 (市史跡) 地図P61 E-4

吉祥寺は、南北朝時代に大友氏8代の氏時が創った寺で、現在のラクテンチのほぼ全域を占めるほどの大きな寺でした。ラクテンチの裏には寺の初代住職や大友氏時の塔などが残されています。



ほんむら
本村天満社のクスノキ
(市保護樹) 地図P61 D-3

南立石本町の本村天満社の境内に生育する巨木で、クスノキとしては別府市で2番目の大きさがあります。高さは約20メートル、幹周りは940センチメートルもあり、御神木として大切にされています。

★ 紹介されたポイント	🏯 神社	🎓 学校	🛣️ 高速道路
P00 参照ページ	🗿 寺院	🚔 警察	🛣️ 国道
♨️ 温泉	⬆️ 山頂	📮 郵便局	🛣️ 主な県道



地図(2) 別府市中心部地図

別府市街地図

地図(3)別府市街地図



しょうじじょう
朝見浄水場 (国登録有形文化財)
地図P62 G-3

朝見浄水場は、旧別府町の水道事業として大正6年に建設されました。当時の面影を残す集合井室や、昭和2年に建設された配水池、配水池南北出入口、量水室なども当時の姿とあまり変わらずに残されています。



海門寺のクロマツ (市天然記念物)
地図P62 I-1

海門寺公園横の海門寺護国禅寺の境内で大切にされてきたクロマツで、枝ぶりの見事さから「しぐれ松」とも呼ばれ親しまれています。かつて砂浜だった北浜海岸に残された数少ない松です。



こりんとくぐん
野口原五輪塔群 (市有形文化財)
地図P62 G-2

昭和56年に、別府公園の南東の角で発掘された南北朝時代の24基の五輪塔と1基の宝塔です。発掘されたとき厚さ1.2メートルほどの土砂に埋まっていた。今は、べつがアリーナ西側公園内に移設しています。



別府市北部地図

地図(3)別府市北部地図

★ 紹介されたポイント	神社	国道
P00 参照ページ	寺院	主な県道
♨ 温泉	警察	
🎓 学校	郵便局	



平田天満社の木立 (市保護樹)
地図P63 L-2

平田天満社の境内にはムクノキ、エノキ、イチヨウ、ヒマラヤスギ、モミなどが木立をつくっています。最も大きなイチヨウは高さ28メートル、幹周り480センチメートルもあり地域の人に親しまれています。



ウスギモクセイ (県特別保護樹木)
地図P63 J-2

鉄輪の旧富士屋旅館に植えられています。高さは約7メートル、幹周りは193センチメートルもあります。花の色は淡い白色で、花の時期には甘い香りを漂わせます。よく手入れされ、木の勢いも盛んです。



かまど こんごん しせき
竈門氏墓地古塔群 (県史跡)
竈門氏墓地五輪塔 (県有形文化財)
地図P63 K-1

野田の羽室御霊社の境内に五輪塔をはじめ、角塔婆、板碑、国東塔などの石塔が建っています。鎌倉時代にこのあたりの地頭であった竈門氏の墓地ですが、源為朝の妃の墓という伝説も残されています。

別府市の未来へ向けて



別府市は、温泉湧出量、源泉数など全国一で、日本一の温泉都市といわれています。しかし、江戸時代までの別府市は、どちらかというところ、地方のひとつの温泉地に過ぎませんでした。この別府市が明治時代以降、急速に発展したのはなぜでしょうか。そこには、長い間別府市の歴史や伝統、文化、産業などをまもり続けた多くの人々がいて、さらに油屋熊八に代表されるように、温泉を生かし別府市を観光都市として生まれ変わろうと、努力した多くの人がいたからだと思います。

別府市では今、「まちをまもり、まちをつくる。べっふ未来共創戦略」という計画を立てて、別府市の進む方向を、市民のみなさんと一緒に考えています。

私は、「まちまもり」こそ「まちづくり」であり、別府市の歴史・伝統・文化・産業を磨き続けることが、別府の誇りを再建し、別府市の新たな誇りを創生するに違いないと確信しています。

別府市の歴史・伝統・文化・産業を磨くことは、すなわち、私たちが暮らす地域の宝を磨くことであり、「地域を磨き、別府の誇りを創生する」ことが自らの使命であると心に刻みました。

別府市は、素晴らしい温泉と豊かな自然、そしてほかでは体験することのできない温泉文化が育まれた唯一無二の、世界中が憧れるまちです。

みなさんも、この「別府学」で、別府のことをくわしく学び、故郷別府を愛し、これからの別府市の未来へのまちづくりを自ら担うような大人になるように心から期待しています。

別府市長 長野恭紘

編集委員

豊田寛三(委員長) 鶴田浩一郎(副委員長) 段上達雄* 小田毅* 清水宗昭*
首藤康 高橋伸子 平野芳弘* 淵優子 糸長憲司 平野俊彦 本田明彦 篠田誠
(*は執筆者)

専門委員

入江秀利* 外山健一* 吉武順造 加藤ひろみ 堀英樹* 柏本文俊
森修二郎 二宮俊和 本山薫 (*は執筆者)

協力者

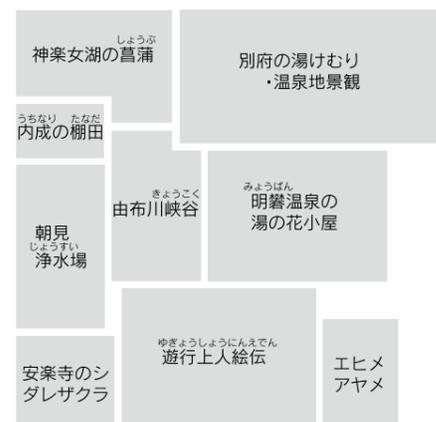
大分県立歴史博物館 大分市教育委員会 大分市歴史資料館 別府大学文化財研究所
平野資料館 大分昆虫同好会 みょうばん湯の里 株式会社さわやか倶楽部 三宅武
玉川剛司 足立高行 金只遼太郎 高野裕樹 高野橋豊 松尾敏生 藤田洋三

参考文献

「生物多様性とは何か」井田徹治 2010
「Red Date Book 2014-8 植物」環境省 2015
「レッドデータブック 2011 普及版」大分県 2010
「第2次 生物多様性おいた分県戦略」大分県 2016
「春木芳元遺跡古寺地区」別府市教育委員会 2007
「べっふの文化財No.42-別府市の古墳文化」別府市教育委員会 2012
「べっふの文化財No.44-石垣原合戦」別府市教育委員会 2014
「べっふの文化財No.45-伝統産業 湯の花」別府市教育委員会 2015
「べっふの文化財No.46-別府に生きる希少野生動物」別府市教育委員会 2016
「風土記」岩波書店 1958
「二豊路万葉をたずねて」NHK大分放送局 1991
「図説 宇佐・国東・速見の歴史」郷土出版社 2006
「レッドデータブックおいた 2011・普及版」大分県 2011
「レッドリスト」環境省 2015
「別府市誌」別府市 2003
「別府市自然環境学術調査報告書「別府の自然」」別府市 1995
「レッドデータブックおいた 2022・普及版」大分県 2023

地図 この地図の作成に当たっては、国土地理院発行の50万分1地方図及び2万5千分1地形図を参考にした。

表紙の写真



中学校学習資料 別府学

初版 平成29年(2017年)3月31日
第8版第1刷 令和7年(2025年)3月31日
発行者 別府市教育委員会
〒874-8511
大分県別府市上野口町1番15号
TEL0977-21-1111
FAX0977-22-5100
編集・印刷 株式会社 佐伯コミュニケーションズ